最終講義, 明治大学サービス創新研究所, 2023年3月21日.

隠蔽され誤解される創造性

Ver. 1.0　2023年3月21日

明治大学法学部・教授　阪井和男
明治大学サービス創新研究所・所長、アート思考研究会・代表幹事
ドラッカー学会・フェロー(前代表)、早稲田大学情報教育研究所・招聘研究員、
日本ビジネスコミュニケーション学会・副会長

https://drive.google.com/file/d/12tjNrTM3JbAnWitSIh4V6k3i12XXKzWc/view?usp=sharing
presen_siing_最終講義_20230321.pptx

略歴(2023年3月19日現在)

阪井和男 Kazuo Sakai

明治大学 法学部教授
(理学博士)
saka1kaz@yahoo.co.jp
facebook.com/saka1kaz

＜研究テーマ＞
組織と社会の死生学
＜略歴＞
1952年　和歌山県和歌山市生まれ
1971年　和歌山県立桐蔭高校卒業
1977年　東京理科大学理学部物理学科卒業
1979年　同大学院理学研究科修士課程物理学専攻修了
1985年　同大学院理学研究科博士課程物理学専攻退学
(6年間在籍)。ソフトハウスに勤務
1987年　理学博士(論文, 東京理科大学)取得。
サイエンスライター(フリー)
1990年　明治大学法学部専任講師
1993年　明治大学法学部助教授
1998年　明治大法学部教授

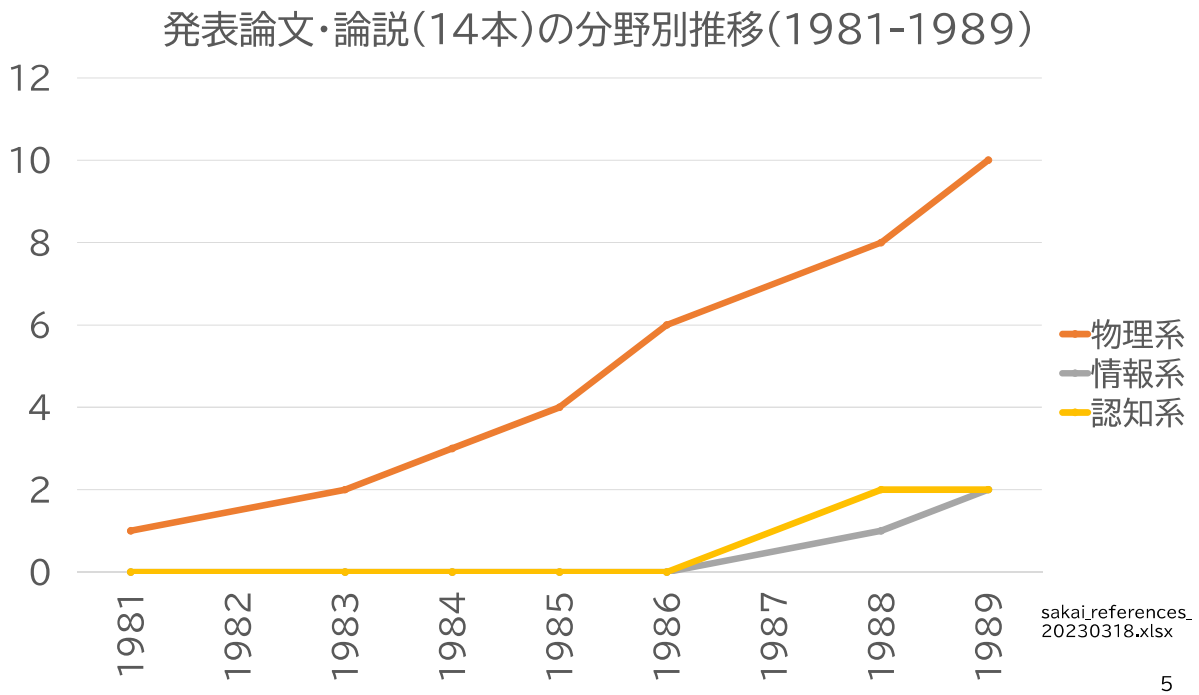
＜役職等＞
明治大学サービス創新研究所 所長
明治大学情報化戦略協議会 委員
＜公職等＞
大船渡市産官学地域課題研究会 座長
日本ビジネス・コミュニケーション学会 副会長
アカデミック・コーチング学会 副会長
アート思考研究会 代表幹事
ドラッカー学会 フェロー・前代表理事
早稲田大学情報教育研究所 招聘研究員
情報コミュニケーション学会 顧問
電子情報通信学会 思考と言語研究会(TL) 顧問
芸術思考学会 顧問
＜NPO等＞
一般財団法人オープンバッジ・ネットワーク 理事
一般社団法人日本オープンオンライン教育推進協議会
(JMOOC)理事
NPO実務能力認定機構 理事
一般社団法人 教育機関の情報環境構築と人材育成協議会
(通称:ファーストスタープロジェクツ) 理事

目次

0. これまでの業績の概要
1. 創造性を隠蔽する後知恵
2. 創造性を生み出すダイナミクス
3. 誤解される創造性
4. 創造的なアクティビティ
補遺:業績一覧

「個」を強くする大学。
We strengthen the individual.
明治大学
MEIJI UNIVERSITY

0. これまでの業績の概要

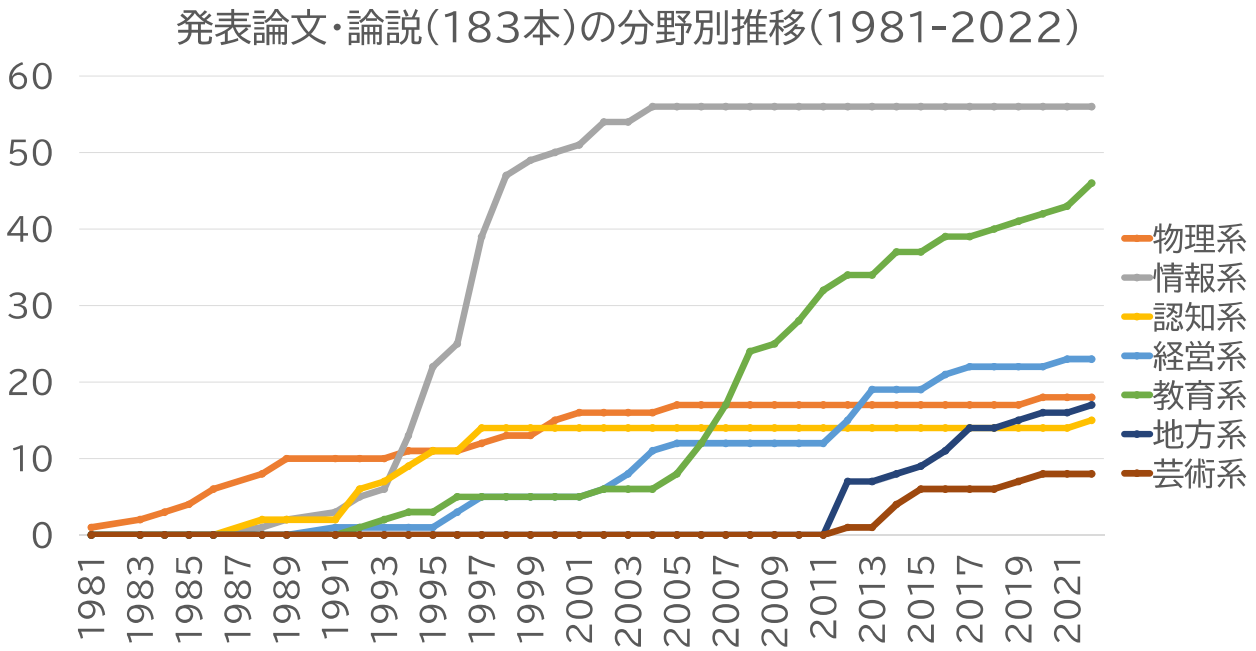


sakai_references_20230318.xlsx

5

博士課程の主な論文(物理系)

- Yoshihiro Yamaguchi and Kazuo Sakai(1988), "Structure change of basins by crisis in a two dimensional map", Physics Letters A, Vol. 131, No. 9, pp. 499-504, Sep. 1988.
- Kazuo SAKAI(1986), "Vibronic theory of a structual phase transition and a tricritical point in IV-IV compounds", Physical Review B, Vol. 34, No. 11, pp. 8019-8037, Dec. 1986.
- Yoshihiro Yamaguchi and Kazuo Sakai(1986), "1/f noise spectrum of the chaotic motion in a whisker mapping", Physics Letters A, Vol. 117, No. 8, pp. 387-393, Sep. 1986.
- Kazuo Sakai and Yoshihiro Yamaguchi(1984), "Nonlinear dynmics of a Josephson oscillator with a cos ϕ term driven by dc-and ac-current sources", Physical Review B , Vol. 30, pp. 1219-1230, Aug. 1984.
- Yoshihiro Yamaguchi and Kazuo Sakai(1983), "New type of 'crisis' showing hystereses", Physical Review A, Vol. 27, No. 5, pp. 2755-2758, May 1983.
- Kazuo Sakai, Chikara Ishii and Hidetoshi Fukuyama(1981), "Effects of impurities on diamagnetic susceptibility of bismuth", Journal of the Physical Society of Japan, Vol. 50, No. 11, pp. 3590-3602, Nov. 1981.



sakai_references_20230318.xlsx

最近の主な発表論文

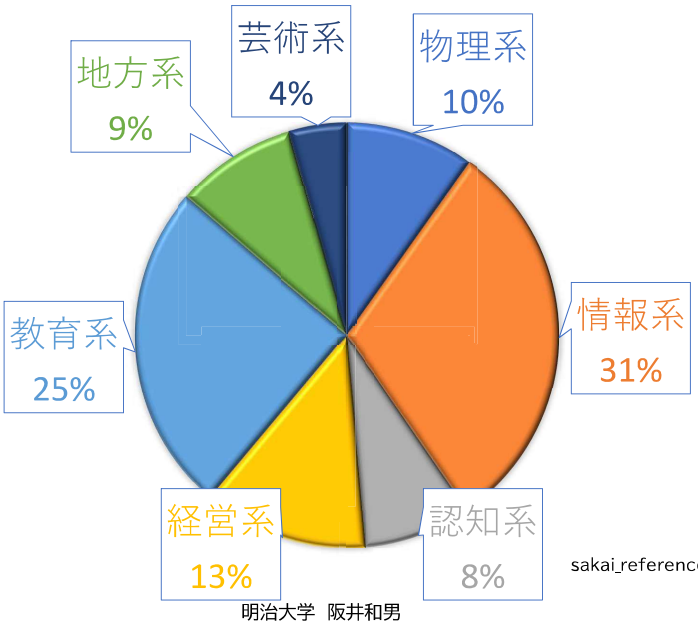
- 秋山ゆかり・阪井和男(2020),「アート思考はブームになったのか？:デザイン思考とアート思考の社会的受容」,『次世代研究』, 明治大学サービス創新研究所, No. 2, pp. 42-55, 2020年5月1日. http://service-innovating.jp/upload/2f77d526920aa94e537e43a99429c1ea.pdf
- 阪井和男(2018), “多重知能理論とその大学教育への応用:アクティブラーニング設計原理としての多重知能理論の可能性”,電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ, *Fundamentals Review*,第11巻, 第4号, pp. 266-287, 2018年. DOI https://doi.org/10.1587/essfr.11.4_266
- 阪井和男・高野陽太郎(2017), “後知恵バイアスが隠蔽する創造性:企業イノベーションにおける2つの創発メカニズムの解明:戦略行動による組織文化の創発と場による戦略行動の創発”,『横幹』, 第11巻, 第1号, pp. 32-51, 2017. DOI https://doi.org/10.11487/trafst.11.1_32
  - https://www.jstage.jst.go.jp/article/trafst/11/1/11_32/_article/-char/ja/
- 宮原俊之・鈴木克明・阪井和男・大森不二雄(2010), “高等教育機関におけるeラーニングを活用した教育活動を支える組織支援体制:「大学eラーニングマネジメント(UeLM)モデル」の提案”, 教育システム情報学会誌, 第27巻, 第2号, pp. 187-198, 2010年. DOI https://doi.org/10.14926/jsise.27.187

➔分野別の詳細は「補遺」を参照のこと。

主な発表論文・論説(地方系)

- 明治大学サービス創新研究所(2022), ”令和3年度IT活用課題解決型人材育成プログラム効果検証報告書”, 株式会社地域活性化総合研究所, 岩手県大船渡市, 2022年3月31日.
- 阪井和男(2020), ”大船渡市に寄り添う阪井ゼミの活動”,『震災等復興活動支援センター活動記録集:「若者の未来」のために、復興支援の輪を広げる』(2011年度～2019年度), 明治大学震災等復興活動支援センター, 2020年5月31日.
- 阪井和男(2019), ”対話による共生的な社会的態度の育成:信州エクスターンシップにおける市民性の創造の試みから”, 全国共同出版,『農業協同組合経営実務』(2019年第74巻増刊号), 第74巻, 第10号(通巻931号), pp. 13-26, 2019年9月15日.
- 阪井和男(2016), ”「本気」の場づくりが学生と社会人の学習を促す:「信州エクスターンシップ」における企業の人材育成と大学のキャリア教育の統合を目指して”, 全国共同出版,『農業協同組合経営実務』増刊号, pp. 54-66, 2016年9月15日.
- 阪井和男・永井優子・齊藤博美・今道正博(2014), ”東日本大震災ニュースソースとタブレット型電子デバイスのクラウド活用による科学的思考法ワークショップにおける教育効果の解析”, 情報コミュニケーション学会第11回全国大会発表論文集, pp. 132-139, 2014年3月2日.
- 阪井和男(2012),「実証実験の検証(英語コミュニケーション特訓講座)」, 明治大学文明とマネジメント研究所, 2011年度実証実験報告書「社会と連携した次世代型教育プログラム(ソーシャルセクター・ビジネスセクターとの協働を目指して)」, pp. 16-20, 2012年1月31日.

発表論文・論説（183本)の分野(1981-2022)



sakai_references_20230318.xlsx

主な著書

- 秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男(2015), ”新規ビジネスを生み出す芸術思考”, 技術情報協会,『研究成果の早期事業化を実現する新規事業テーマの探し方、選び方、そして決定の条件』, 第5章, 第3節, pp. 301-309, 2015年7月31日.
- 阪井和男(2014),『ドラッカー:人・思想・実践』, ドラッカー学会(監), 三浦一郎・井坂康志(編著), 文眞堂, 第9章, pp. 161-171, 2014年10月1日.
- ジョゼフ A.マチャレロ, カレン E.リンクレター(2013),『ドラッカー　教養としてのマネジメント』, 阪井和男・高木直二・井坂康志(訳), 日本経済新聞出版社, 2013年3月1日.
- 阪井和男(2012),『AFPWAA Japan one year after 3.11　AFP通信が世界に配信した東日本大震災』, AFPWAA.
- 宮脇典彦、阪井和男、和田悟(2011),「SPSSによるデータ解析の基礎[改訂版]」, 培風館, 2011年2月1日
- 宮脇典彦、阪井和男(2004),「Excelによるデータ解析の基礎[改訂版]」, 培風館, 2004年11月1日.
- 阪井和男(2004),「ゆらぎの科学と技術　ーフラクチュオマティクス入門ー」, 東北大学出版会, 第11章「組織における戦略行動ゆらぎのカオスモデルによる解釈:ブレークスルーのスキーマ理論」, pp. 147-168, 2004年9月15日.
- 新田功・大滝厚・森久・阪井和男(2001),「経済・経営時系列分析(ファジィ・カオス・フラクタル・ウェーブレット・2進木解析の応用)」, 白桃書房, 第5章「ウェーブレット解析」(pp. 127-145), 第6章「ウェーブレットによるGDPの解析」(pp. 147-171, pp. 127-171, 2001年3月26日.

ごく最近(2023年1月以降)の口頭発表資料

- “量子熱力学と交流分析で見るコーチング”, 越境するアカデミック・コーチング,阪井和男教授明治大学退任記念「越境するアカデミック・コーチング」,「いかにコーチングを広めていくか」番外編,アカデミック・コーチング学会2023年度第2回研究会, TH西新宿ビル6階, 2023年3月19日.
  - https://drive.google.com/file/d/1GpUGgu-Wwle6abIpdUCZOmL8bToqujNX/view?usp=sharing
    - presen_AC_量子熱力学と交流分析で見るコーチング_20230319.pptx
- “「主体性」の機能と逆機能”,特別講演, 情報コミュニケーション学会第20回全国大会(2023/3/11-12), 青山学院大学相模原キャンパス, 2023年3月11日.
  - https://drive.google.com/file/d/1SljN6tHdgekGYmq48G9f08szrmqgc_2v/view?usp=sharing
    - presen_cis_「主体性」の機能と逆機能_20230311.pptx
- “いかに教育を革新すべきか”, WAA (We Are Asian)研究会, 2023年3月21日.
  - https://drive.google.com/file/d/1UpIpe6qnMD21C4tK2nLjy86143MMR_xw/view?usp=sharing
    - presen_WAA_阪井和男_いかに教育を革新すべきか_20230127.pdf

「個」を強くする大学。
We strengthen the individual.
明治大学
MEIJI UNIVERSITY

1. 創造性を隠蔽する後知恵

創造性とはなんだろうか？

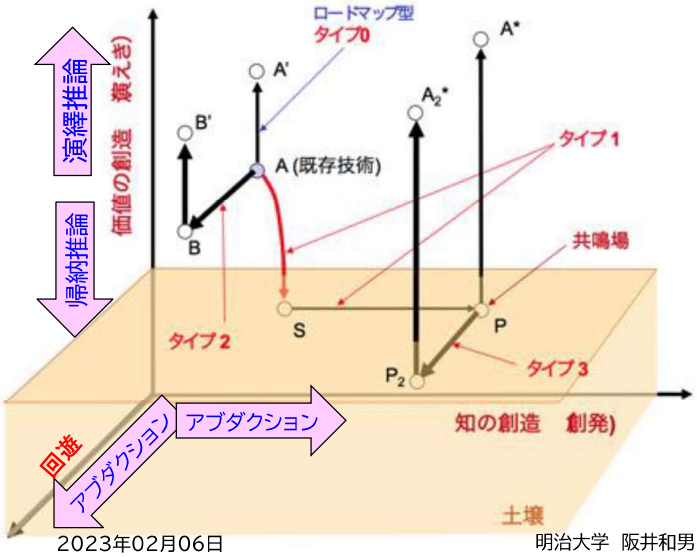
- 創造性とは、ある種の成果を引き起こす要因の中で人の性質に関連したもののひとつ。
- さまざまな要因が提案されているが、その多くは後知恵によって解釈された要因である。
- 創造性による要因の解釈は、納得感が得られやすいためにその要因の重要性を確信させる作用があるものの、それ以上の追究を阻むという意味での思考停止を伴う副作用がある。
- さらに、後知恵による因果関係の錯誤によって、他律的に創造性を生み出せるとの誤解が生じやすい。
- 創造性の起源は動物が本来的にもつ遊びにあるため、創造性の発露には心理的に安全な場でワクワクする集中的な活動が条件となる。
  - （阪井和男・坪田康, 2022年5月8日、日本創造学会用の原案（265字））

創造性は後知恵バイアスで隠蔽される！

- 後知恵の機能
  - 後知恵によって腹落ちした納得感が得られる（確信の誘発）
  - 腹落ちする説得力をもつのは、「真理」「認知バイアス」のいずれか
    - 認知バイアス：
      - 「事前」に働く当たり前「ふつーに考えて」
      - 「事後」に働く「そういうことだったんだ！」➔後知恵バイアス
- 後知恵の逆機能
  - 後知恵が生む「戦略」は創造性を排除する！
    - 戦略は「地図」としての意味がある。たとえ間違っていても行動を誘発するために有用
    - 後知恵で創造性は捉えられない
  - 後知恵は思考停止を招く

阪井和男・高野陽太郎（2017）, "後知恵バイアスが隠蔽する創造性：企業イノベーションにおける2つの創発メカニズムの解明：戦略行動による組織文化の創発と場による戦略行動の創発", 『横幹』, 第11巻, 第1号, pp. 32-51, 2017. DOI https://doi.org/10.11487/trafst.11.1_32
https://www.jstage.jst.go.jp/article/trafst/11/1/11_32/_article/-char/ja/

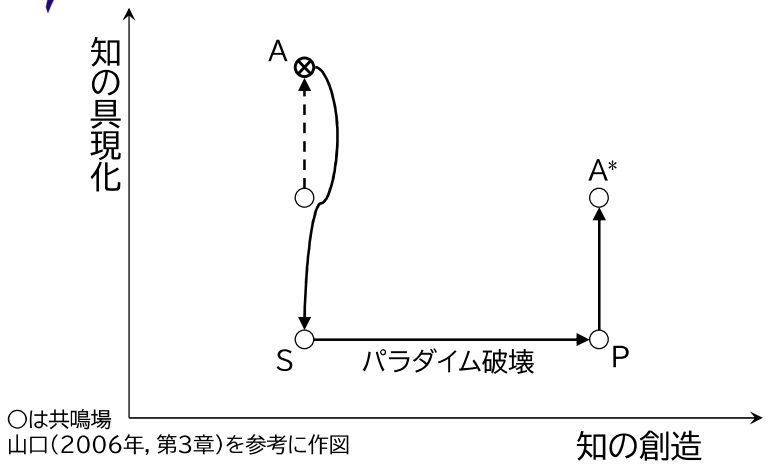
独創性の構造：ブレークスルーの3つの型



- 探究型〈収束〉
  - 意識的：演繹推論⇔帰納推論
    - 高野陽太郎先生型：緻密な論理構成
    - デザイン思考？
- 発見型〈発散〉
  - 意識的：回遊
  - 無意識的：デフォルトモードネットワーク
    - 國藤進先生型：知的な多動症→アフォーダンス
    - アート思考？

図. ブレークスルーの3つの型（山口栄一）
https://ez-cdn.shoeisha.jp/static/images/article/4981/4981_004.jpg（2020年9月15日アクセス）

パラダイム破壊型の創発プロセス

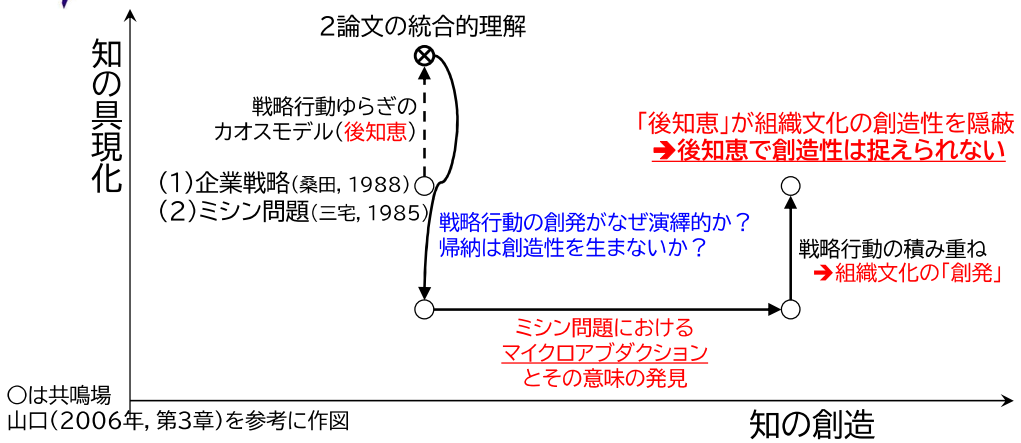


○は共鳴場
山口（2006年，第3章）を参考に作図

- パラダイム破壊型イノベーションの構造
  - 知の「具現化」と「創造」が連鎖して起こる！（山口栄一，2006年，pp.99-100）
- 二つの直交軸
  1. 知の創造
     - パラダイム破壊：誰もできると思っていなかったことをできるようにする知的営み＝研究
  2. 知の具現化
     - すでに知られたことを実行可能なものに仕立て上げる知的営み＝開発

山口栄一，『イノベーション　破壊と共鳴』，NTT出版，2006年3月3日.

「後知恵」論文での創発概念の統合プロセス



○は共鳴場
山口（2006年，第3章）を参考に作図

- 阪井和男・高野陽太郎，"後知恵バイアスが隠蔽する創造性：企業イノベーションにおける2つの創発メカニズムの解明：戦略行動による組織文化の創発と場による戦略行動の創発"，『横幹』，第11巻，第1号，pp. 32-51，2017. DOI https://doi.org/10.11487/trafst.11.1_32
- 山口栄一，『イノベーション　破壊と共鳴』，NTT出版，2006年3月3日.
- 桑田耕太郎（1998），"戦略行動と組織のダイナミクス"，組織科学，Vol. [illegible] pp. 43-54，1998.
- 三宅なほみ（1985），"理解におけるインター楽ションとは何か"，『理解と[illegible]3章，p. 72，東京大学出版会，1985.

「個」を強くする大学。
We strengthen the individual.
明治大学
MEIJI UNIVERSITY

2. 創造性を生み出すダイナミクス

創造性を生み出すダイナミクス

- 創造性はどこに向かうのか？
  - □Well-beingの創造　➔個人→組織→社会のWell-being
- 創造性は何が起点か？
  - □意欲の「やる気スイッチ」　➔疲れを感じるスイッチを切る現生人類
- 創造的なプロセスとは？
  - □PDCAサイクルは回らない！　➔ドラマチックマネジメント・アワードの分析

2023年3月21日　明治大学　阪井和男　20

MEIJI UNIVERSITY

創造性はどこに向かうのか？

世界との関わり方を支配する理解モデル

- 世界の理解？
  - 私たちは世界をどのように理解しているか？
  - 自分の「世界の理解モデル」は正しいか？
- 世界の理解モデル
  - 私たちは、教育（教育制度、教育政策、教育行政、教育機関など）をどのように理解しているか？
  - こうすれば、こうなるはずという打ち手とその反応をどう見通しているか？
- 理念的な理解モデルと実質的な理解モデル
  - 理念的な理解
    - 価値評価を確立した「理念」や「常識」、「憶測」にもとづいて、こうすれば良いはずと決め打ち
  - 実質的な理解
    - どこを打てばどう響くかを見通し、その反応を振り返る指標を定めて、打ち手を打つ

理念的な理解と実質的な理解を区別する

- トゥールミンの論証の三角形
  - トゥールミン（Stephen Toulmin）は、ある「主張」（claim）を論証するためには、それを支えるデータ（data, ground「根拠」）と、データが主張につながるためのロジックであるワラント（warrant「論拠」）が必要であるとした（向後, 2018）

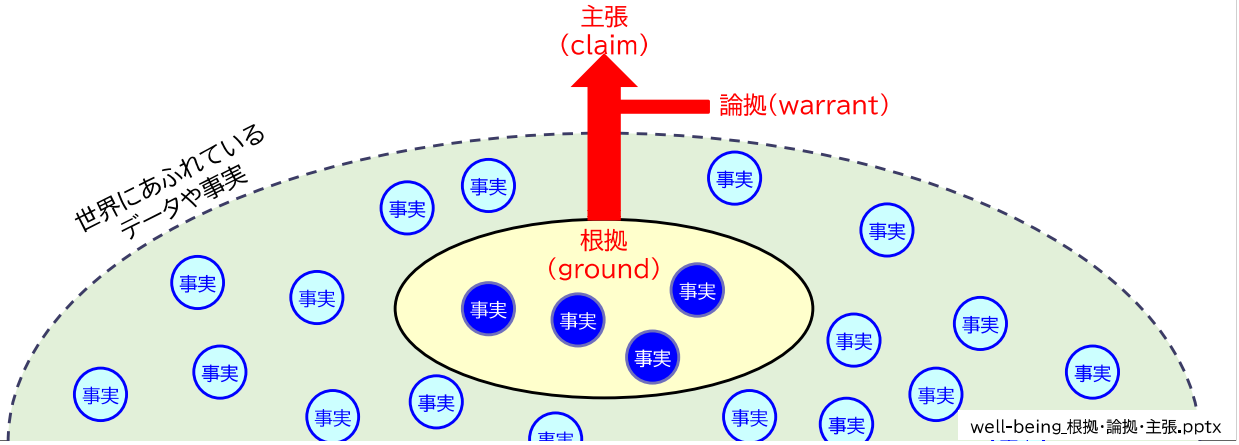
- （向後, 2018）向後千春, "トゥールミンの三角ロジック ～論証の方法～", 向後研究室教材サイト, 2018. https://kogolearn.wordpress.com/studyskill/chap4/sec2/ （2019年10月27日アクセス）
- （青木, 2017）青木滋之, "拡張型のトゥールミンモデル：ライティングへの橋渡しの提案", 『会津大学文化研究センター研究年報』, 第23号, pp. 5-24, 2017年3月. https://u-aizu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=141&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1 （2018年3月25日アクセス）

トゥールミンの議論モデル

- トゥールミンの6要素
  - 法廷での議論の一般的レイアウトを素描する非形式論理の哲学書（1958）を書いた
    - 根拠（ground）、論拠（warrant）、主張（claim）、限定詞（qualifier）、反駁（Rebuttal）、裏付（Backing）
- トゥールミンの目的
  - 数学モデルによる形式論理である伝統的な形式的三段論法に不満
  - 日常的な議論を適切に理解すること
- 論証の三角形
  - 青木（2017）は、ディベートをテーマとしたライトノベルの議論を題材にトゥールミンモデルで分析することによって、主張（C）と根拠（G）、ワラント（W）の3つで十分であることを明らかに

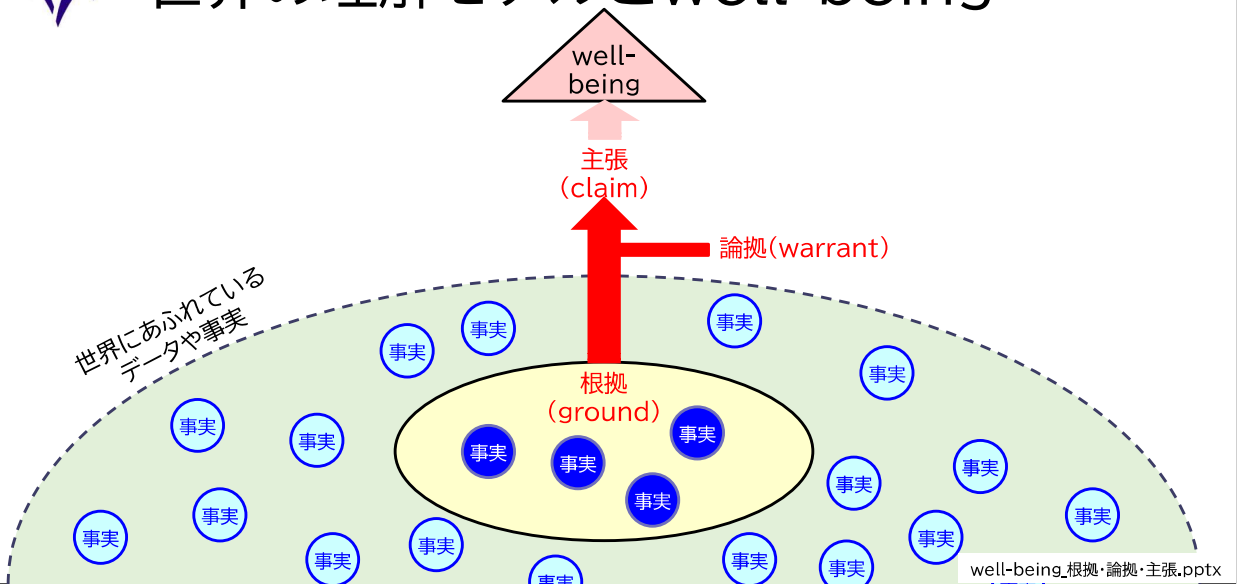
Toulmin, Stephen (1958) The Uses of Argument , Cambridge University Press. 邦訳：スティーヴン・トゥールミン, 『議論の技法』, 戸田山和久・福澤一吉（訳）, 2011/5/13.
Toulmin, Stephen, Rieke Richard, Janik Allan, (1979/1984) An Introduction to Reasoning (1st/2nd edition), Macmillan Publishing.
Toulmin, Stephen (2003) The Uses of Argument (Updated Edition), Cambridge University Press.
Toulmin, Stephen (2006) "Reasoning in Theory and Practice" in Hitchcock, D. & Verheij, B. (eds.), Arguing on the Toulmin Model: New Essays in Argument Analysis and Evaluation ,Springer.

世界の理解モデル



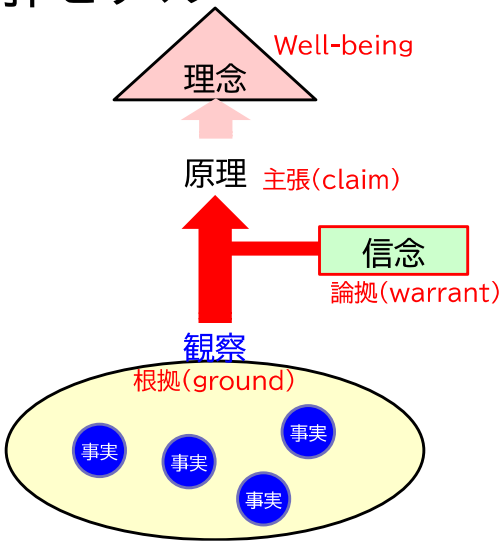
well-being_根拠・論拠・主張.pptx

世界の理解モデルとwell-being

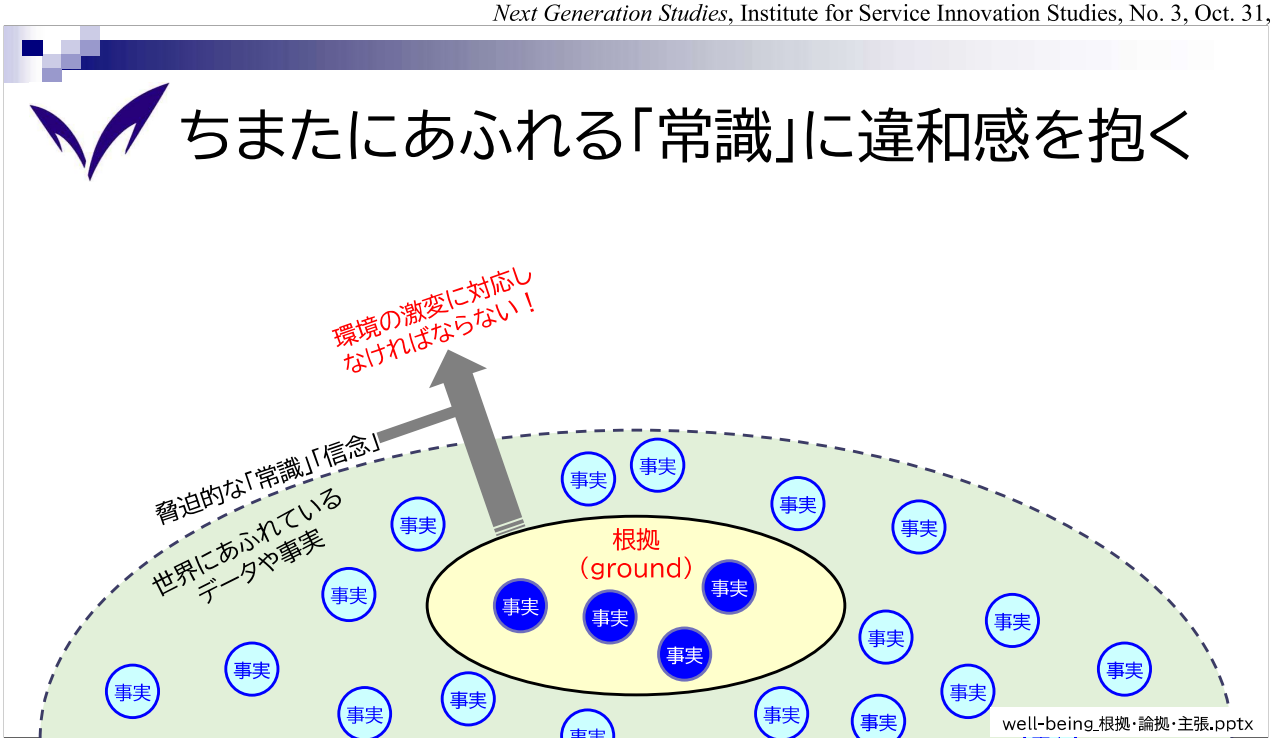


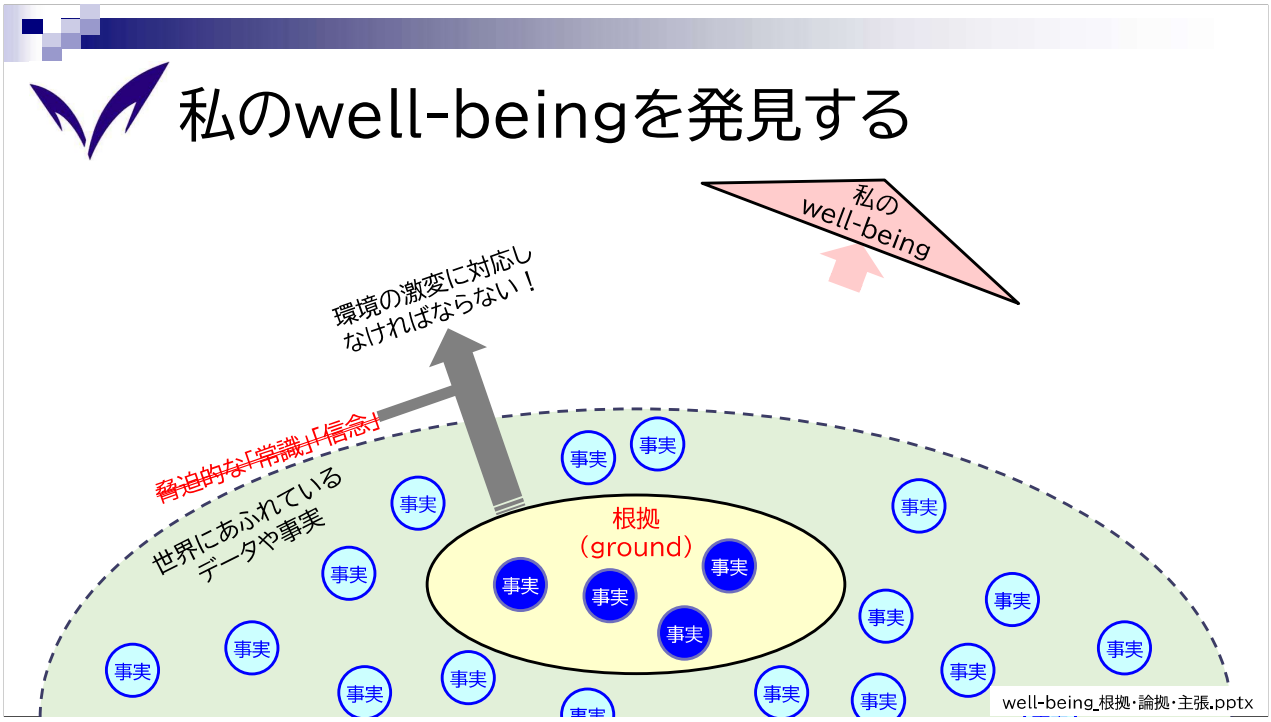
well-being_根拠・論拠・主張.pptx

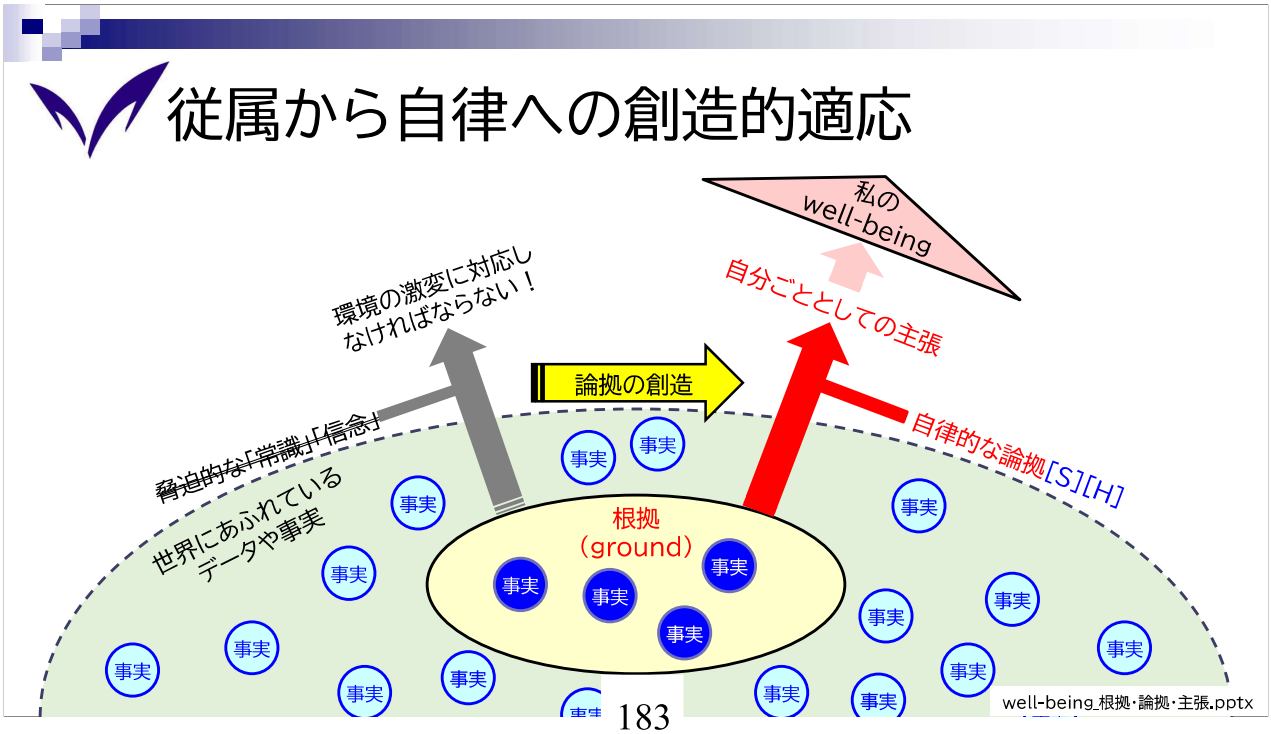
世界の理解モデル



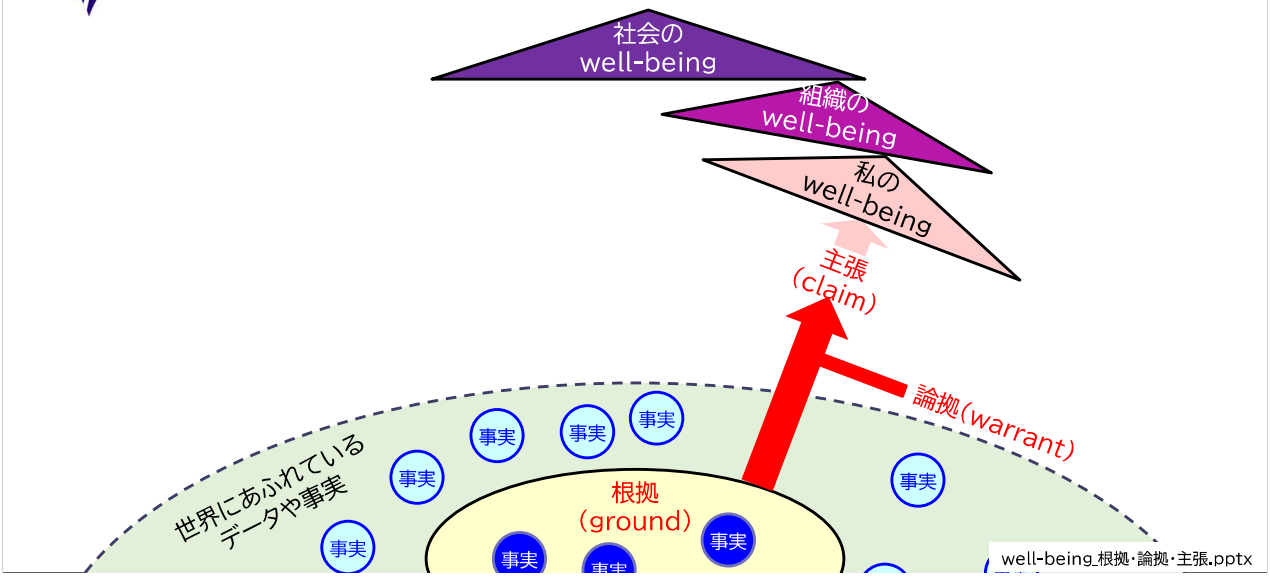
well-being_根拠・論拠・主張.pptx


ちまたにあふれる「常識」に違和感を抱く
環境の激変に対応しなければならない！
脅迫的な「常識」「信念」
世界にあふれているデータや事実
根拠
(ground)
事実
well-being_根拠・論拠・主張.pptx


私のwell-beingを発見する
私の well-being
環境の激変に対応しなければならない！
脅迫的な「常識」「信念」
世界にあふれているデータや事実
根拠
(ground)
事実
well-being_根拠・論拠・主張.pptx


従属から自律への創造的適応
私の well-being
自分ごととしての主張
環境の激変に対応しなければならない！
論拠の創造
自律的な論拠[S][H]
脅迫的な「常識」「信念」
世界にあふれているデータや事実
根拠
(ground)
事実
well-being_根拠・論拠・主張.pptx

社会的well-beingへの統合



well-being_根拠・論拠・主張.pptx

創造性は何が起点か？

- やる気スイッチを入れる
  - 認定NPO法人キーパーソン21
    - https://www.keyperson21.org/
- やる気スイッチはどこにある？
  - やる気スイッチは脳の中の線条体にある
- やる気スイッチを入れたあと・・・
  - ユンケル黄帝液(タモリ)
    - 「元気の前借りシステム。あとでどっと疲れがくる」
      - 『森田一義アワー 笑っていいとも!』(フジテレビ系列。1982-2014年。司会:タモリ)の放送終了後のフリートーク内での発言で、佐藤製薬からタモリ宛にユンケルが大量に贈られ、ユンケルシリーズのテレビCMにも出演

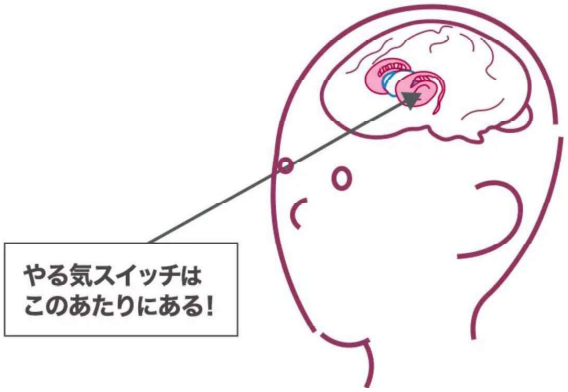


図. 線条体の脳内位置
https://life-and-mind.com/wp-content/uploads/2021/05/motivation switch brain 001 02.jpg.webp (2023年3月4日アクセス)

- 池谷裕二,『単純な脳、複雑な「私」』, 朝日出版社, 2009/5/8.
- 池谷裕二,『単純な脳、複雑な「私」』, ブルーバックス, 講談社, 2013/9/5.

2023年3月11日　明治大学　阪井和男　32

MEIJI UNIVERSITY

PDCAサイクルは回っているか？

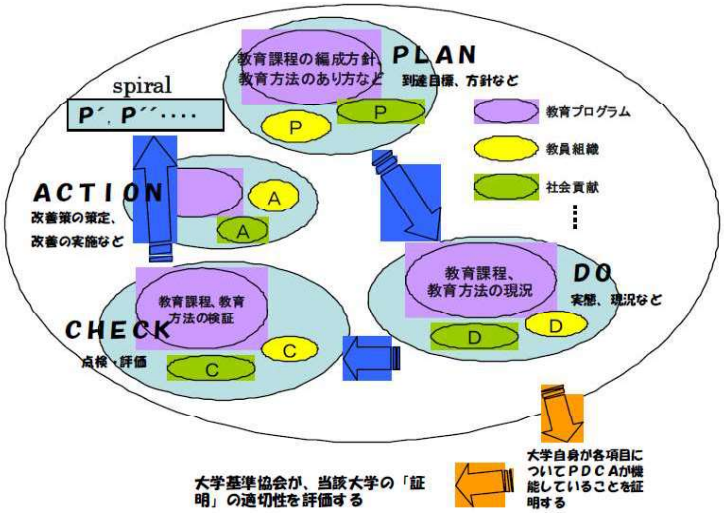
新大学認証評価システム

- 内部質保証システムの輪郭

「自己点検・評価はそれ自体が目的ではなく、その結果を改革・改善へつなげることが重要です。
経営学で言われてきたPDCAサイクルとは、目標・計画を立て（Plan）、実行し（Do）、結果を点検・評価し（Check）、改善・見直しを行う（Action）といったプロセスを意味しています。
つまり、自己点検・評価は、実行した結果が目標や計画に沿ったものになっているか、沿っていないとすれば何が問題なのか、大学の経営戦略が不明確なのか、目標や計画が不適切だからなのか、実行上の問題なのか、などを根拠をもとに冷静に検証し、ポジティブなアクションと結びつくには、どうすればよいかを考えることなのです。」

大学基準協会,「新大学認証評価システム　ガイドブック―平成23年以降の大学認証評価システムの概要」, p. 3, 2009年10月

「大学の内部質保証システムを評価する」概念図



大学基準協会,「新大学認証評価システム　ガイドブック―平成23年以降の大学認証評価システムの概要」, p. 4, 2009年10月

内部質保証システム

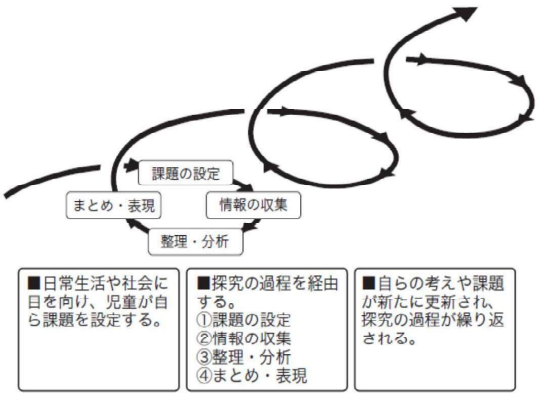
「内部質保証システムを有効に機能させるということは、すなわち、各評価の視点ごとに、大学・学部等自身が、前述のPDCAサイクルをきちんと回転させ続けるということです。その際、同サイクルは、1回転するごとに位相を改善・改革の方向に上昇させ、結果としてスパイラルを描くことになります。」

大学基準協会,「新大学認証評価システム　ガイドブック―平成23年以降の大学認証評価システムの概要」, p. 3, 2009年10月

- イノベイティブな活動は、PDCAサイクルがスパイラルに進むか？

阪井和男, "明治大学でのICT活用事例とその効果", ICT活用教育 [illegible] ICT活用教育入門　～ICT活用の効果と事例～, 放送大学ICT活用・遠隔教育センター, 明治大学駿河台キャンパスアカデミ [illegible] A3会議室, 2009年12月18日.

スパイラルな発展のイメージ



- 探究的な学習における児童の学習の姿
  - 図. 探究的な学習における児童の学習の姿, ”小学校学習指導要領解説:総合的な学習の時間編”, 文部科学省, p. 16, 2008年(平成20年)6月.
    - https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_013.pdf (2023年1月23日アクセス)

ドラマチック・マネジメントアワード (旧:ネクストワールド・サミット)

- 会社を超えた実践的な人材育成研修
- 2012年春から実施されたネクストワールド・サミット[6][7]
  - 他社の人たちと共に研修する人材育成の実践研修の場
  - 2012年に葬儀業界から立ち上がった
  - 2013年からは, 葬儀業界の枠をはずして全業界を対象として活動中
  - 2018年、第7期大会(12月7日)から、ドラマチック・マネジメントアワードに改称
  - 2022年、第11期完了
    - https://doramane.com/

[6] 一般社団法人日本儀礼協会, “ネクストワールド・サミットのウェブサイト”, http://www.girei.org/ (2013年2月17日アクセス)
[7] 一般社団法人日本儀礼協会,『第1回ネクストワールド・サミット公式ガイドブック』, 2012.

第1回ネクストワールド・サミット(現:ドラマティックマネジメント・アワード)場内(2012年11月30日)

http://www.girei.org/summary2012.html (2013年4月8日アクセス)

第1回ネクストワールド・サミット(現:ドラマティックマネジメント・アワード)審査委員(2012年11月30日)

http://www.girei.org/summary2012.html (2013年4月8日アクセス)

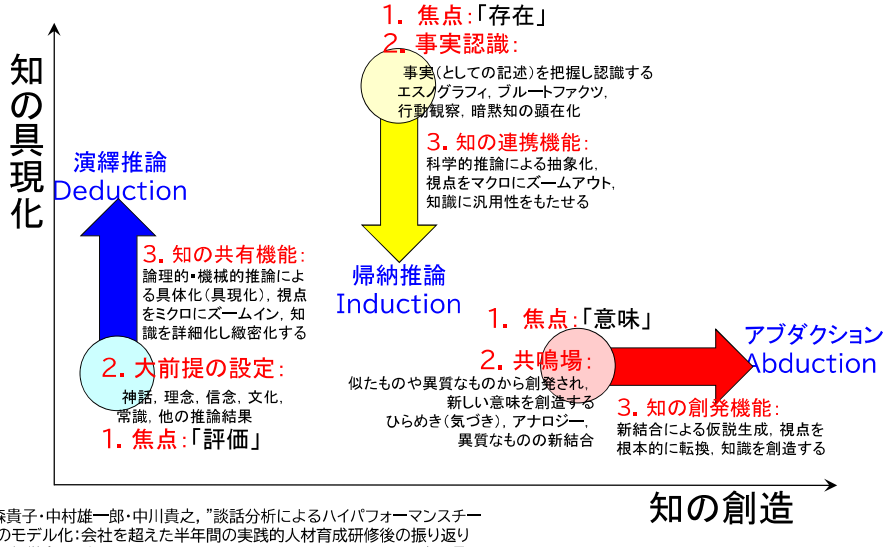
第1回ネクストワールド・サミット(現:ドラマティックマネジメント・アワード)森憲一プロデューサー(2012年11月30日)

http://www.girei.org/summary2012.html (2013年4月8日アクセス)

チーム名	チームα	チームβ	チームγ	チームδ
創業	21年	26年	38年	40年
場所	群馬県	宮城県	神奈川県	福岡県
従業員数†	45名	348名	260名	67名
主要メンバ	9名‡	5名	7名	10名‡
メンバ構成	葬儀の施行担当5名, 仏壇の販売担当2名, 事務担当1名, 後継者の役員1名	葬儀の施工担当4名, 事務担当1名	葬儀式典の接遇専門のスタッフ(正社員)	葬儀式典の接遇担当2名, 葬儀の営業担当3名, 生花担当3名, 事務担当1名, 関連会社(仕出屋)の役員1名
年齢構成	30代前半～60代前半	20代半ば～30代前半	20代前半～40代半ば	20代後半～50代後半
チームリーダ	仏壇の販売責任者(40代前半)	施行担当(30代前半で最年長)	接遇部門のリーダ(20代後半で最長社歴)	営業担当(30代半ばの管理職)
男:女	5:4	3:2	0:7	7:3
組織分化	未分化	分化	高度に分化	やや分化(女子は分化)
社長	創業者(1代目)	創業者(1代目)	直系の後継者(2代目)	非直系の後継者(3代目)(勉強会に参加)
社長の影響力	非常に強い	非常に強い	現場にはあまりない	現場にはあまりない(男子あり, 女子なし)
従業員の闊達さ	なし	なし	あり	男子なし, 女子あり
リーダ	支配型リーダ	サーバントリーダ	中空(学級委員)型	中空(学級委員)型
暗黙の秩序(調整役)	直系の後継者がメンバーに入り、チームの撹乱役	養育的な調整役	養育的な調整役	男女で大きく異なる
変化(成長)の特徴	対処療法的 変化しきれなかった	根治療法的 チーム内にとどまる	根治療法的 チーム内にとどまる	根治療法的 全社的に波及

創業は, 2012年2月1日現在の設 数. †非正規雇用を含む. ‡社員全員が活動に参加の方針をとった.

推論分析における3推論方向



阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之, "談話分析によるハイパフォーマンスチームのイノベーションプロセスのモデル化:会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析", 信学技報, 電子情報通信学会, vol. 113, no. 82, TL2013-1, pp. 1-6, 2013年6月.

47

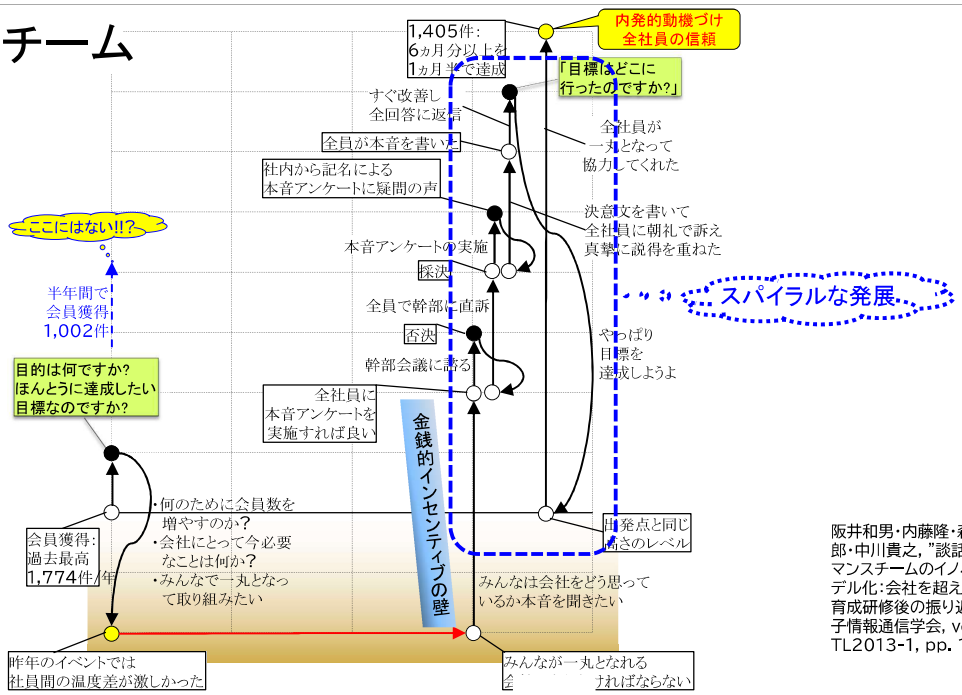
推論分析の例(αチーム)

↑	→	距離	記号	内容	コメント
0	0	0	○	新規会員獲得818件、少額短期保険55件	
1	0	1	↑	5チームを編成、数値目標を割振り	
1	0	1	◎	勉強会	共鳴場
2	0	2	↑	完全なトップ依存組織になっていた	
2	0	2	●	社長の決意「この活動に一切 口出しない」	
1	0	1	↓		
1	0	1	◎	勉強会	共鳴場
1	1	1.41	→	色付きグラフによる見える化、メーリングリストで励まし・感謝、初の飲み会開催	トップ依存からの脱却
1	1	1.41	○	「自己決定の原則」を徹底	
2	1	2.24	↑	表彰式を実施	
2	1	2.24	○	従業員同士でよく話す	
3	1	3.16	↑	「何でもかんでも報告書」、「いつも誰かがどこかで頑張っているFax」をチームリーダが全店に配信	
3	1	3.16	○	自ら考え行動する、変化に対する執着	
4	1	4.12	↑	「チャレンジ12」、「1日2件帰れません宣言」	
4	1	4.12	○	新規会員獲得1,684件、少額短期保険契約227件	

2013年6月14日　阪井・内藤・森・森・中村・中川

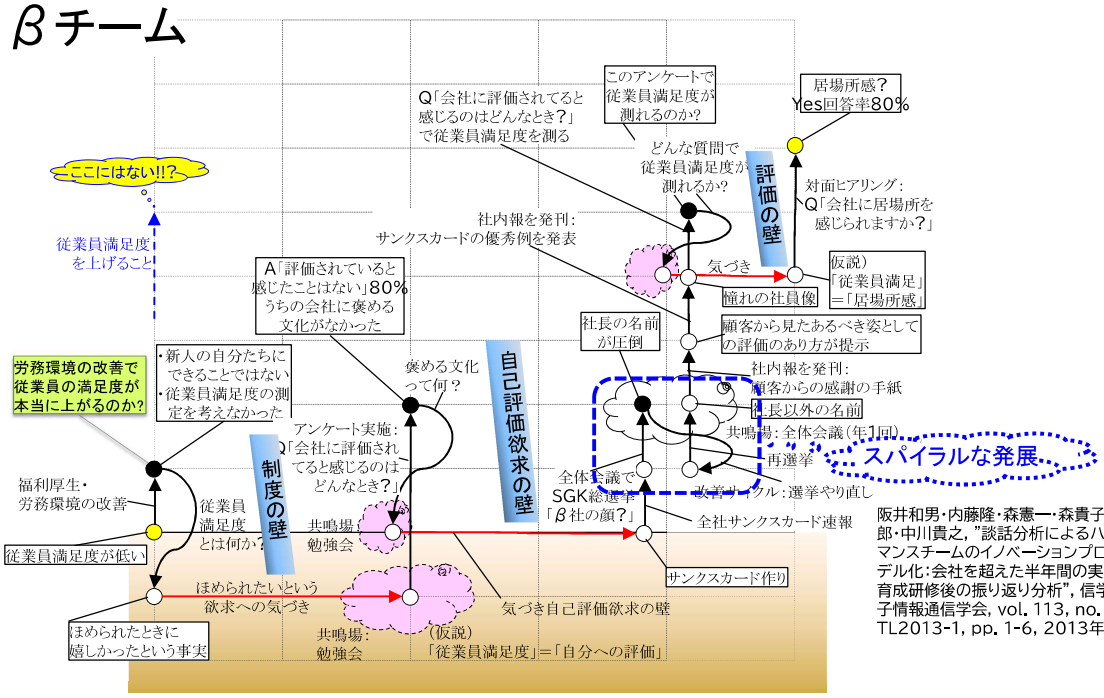
48

δチーム



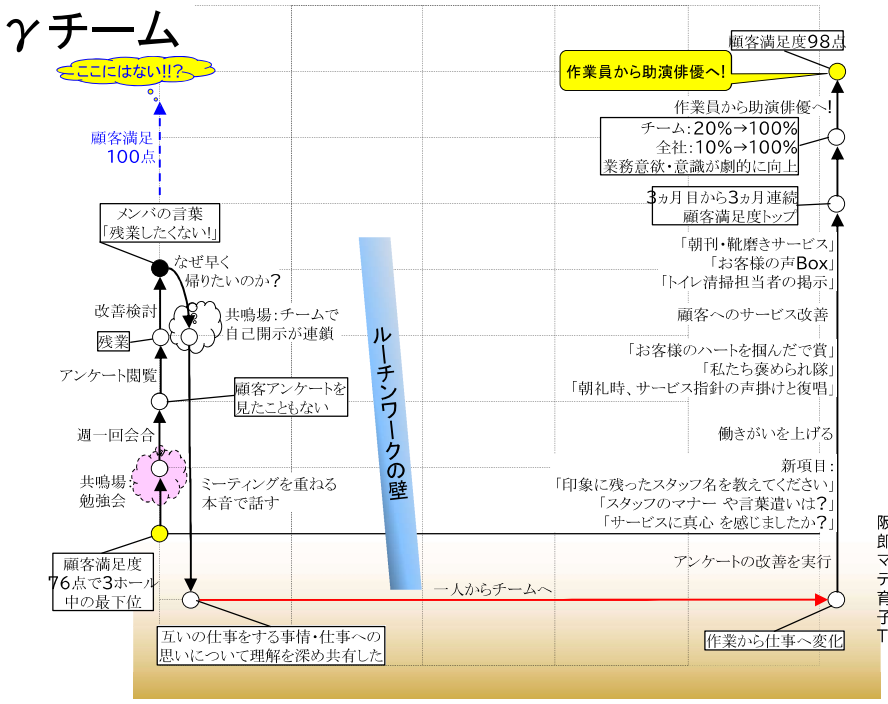
阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之, "談話分析によるハイパフォーマンスチームのイノベーションプロセスのモデル化:会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析", 信学技報, 電子情報通信学会, vol. 113, no. 82, TL2013-1, pp. 1-6, 2013年6月.

49



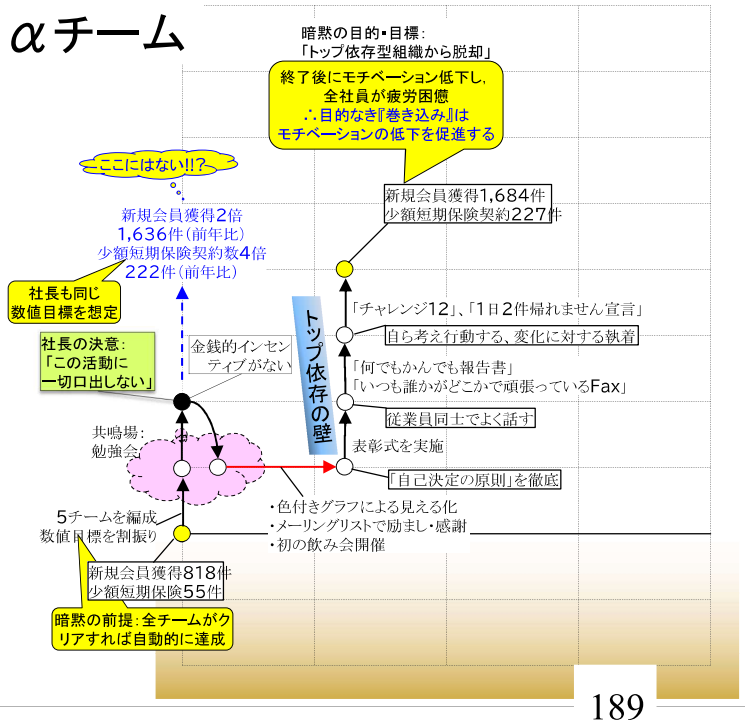
阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之, "談話分析によるハイパフォーマンスチームのイノベーションプロセスのモデル化:会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析", 信学技報, 電子情報通信学会, vol. 113, no. 82, TL2013-1, pp. 1-6, 2013年6月.

50



阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之, "談話分析によるハイパフォーマンスチームのイノベーションプロセスのモデル化:会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析", 信学技報, 電子情報通信学会, vol. 113, no. 82, TL2013-1, pp. 1-6, 2013年6月.

51



阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之, "談話分析によるハイパフォーマンスチームのイノベーションプロセスのモデル化:会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析", 信学技報, 電子情報通信学会, vol. 113, no. 82, TL2013-1, pp. 1-6, 2013年6月.

52

MEIJI UNIVERSITY

PDCAサイクルを回してはいけない！

PDCAの前提条件

演繹法としての前提条件

Plan：目標を設定して計画を立てることができる
- チェスだと思っていたら, 実はポーカーだった
- 状況変化の激しい即興劇, 即興演奏, 真剣勝負*だった

Do：仕事を実行しても致命的な失敗にならない
- 失敗の許されない計画だった

帰納法としての前提条件

Check：妥当な検証方法が存在する
- 実は検証方法がなかった
- 検証方法でアフォードされて思考の罠に陥った**

Action：改善によって確実に目標へ向かう
- 修正すれば目標へ近づくと思っていたら, 大混乱に陥った

*清水博,『生命知としての場の論理(柳生新陰流に見る共創の理)』, 中公新書 1333, 中央公論新社, 1996年11月25日.
**栗木 契,「マーケティングにおけるデザインの罠」,『流通研究』, 日本商業学会, Vol. 9 No. 1, pp. 17-39, 2006.
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_90000549 (2009年10月21日アクセス)

2010年1月22日 明治大学 阪井和男・栗山健 64 64

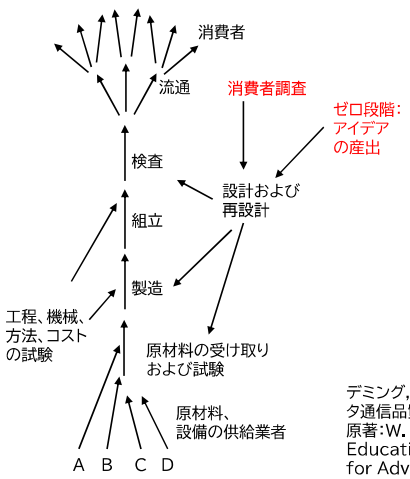
PDCAの問題点

1. 安易にトップダウンで押し付ける
   - 現場従事者にとって改悪例が続出、トラブルの温床と化す
2. 小手先のループを繰り返す
   - 『右のものを左に動かす』のカイゼン後、『左に動かしたものを右に動かす』のカイゼンを行う
   - 何の改善にもならず失敗に終わる
3. カイゼンのためのカイゼンが本末転倒な事態を生む
   - カイゼンの深度が高まるにつれ限界効果は逓減
   - 労働時間の増加による過労死や労働災害の増加
4. 新しい方法を生む『改革』や『変革』の芽を摘む
   - 現状に立脚した一部変更に留まるため

http://ja.wikipedia.org/wiki/カイゼン (2009年11月23日アクセス)

2010年1月22日 明治大学 ・栗山健 65 65

PDCAサイクルの原型

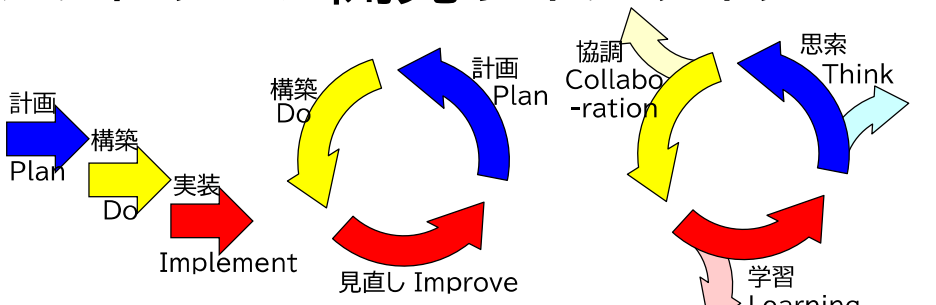


- 1つのシステムとしてみた生産
  (デミング,1996年,pp.68-69)
  - 品質の改善は, 入ってくる原材料から顧客まで, また, 将来へ向けての製品サービスの再設計を含めて全生産ラインにわたっている
  - この図は, 日本で1950年8月に使用された
  - サービス組織においては, 生産の原資となるA, B, Cなどは, データソースであったり, 前工程の作業であったりする
    - 例えば, デパートにおける代金, 代金の計算, 預金, 払い戻し, 在庫の入出, 転記, 出荷指示などのようなものである

デミング, W・エドワーズ,『デミング博士の新経営システム論(産業・行政・教育のために)』, NTTデータ通信品質管理研究会訳, NTT出版, 1996年3月21日.
原著:W. Edwards Deming, "The New Economics: For Industry, Government, Education (Second Edition)", Massachusetts Institute of Technology, Center for Advanced Educational Services, Cambridge, Massachusetts, 1994.

2011年1月26日 明治大学 阪井和男 66

ソフトウェア開発ライフサイクルの進化



ウォーターフォール型 Waterfall

イテレーション型 Iteration
(進化型・スパイラル型・RAD)

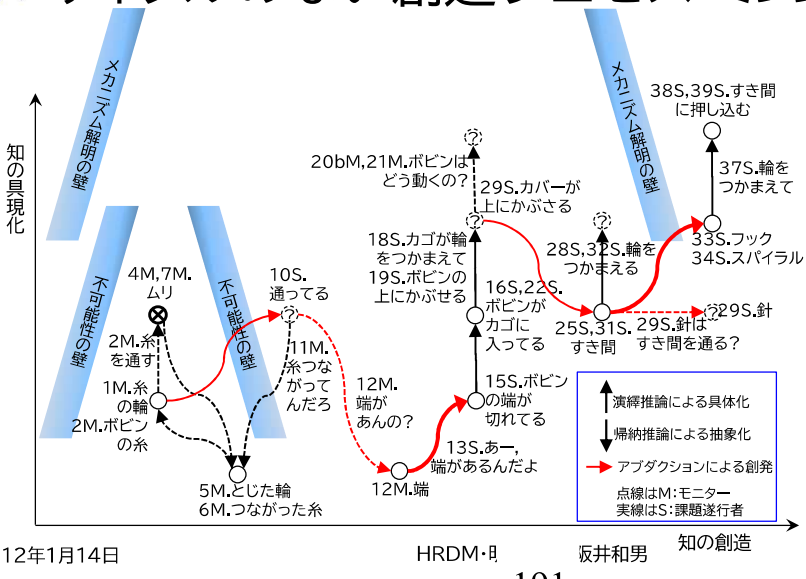
適応型 Adaptation
副次的な矢印は, 最初に立てたプロジェクトのミッションプロファイルから大きく外れた結果を見つけ出す新しい考え方(ハイスミス, 2003年, p. 37)

(ハイスミス, 2003年, pp. 35-37)

ハイスミス, ジム,『適応型ソフトウエア開発(変化とスピードに挑むプロジェクトマネージメント)』, ウルシステムズ監訳, 山岸耕二・中山幹之・原幹・越智典子訳, 翔泳社, 2003年. 原著:Highsmith, James A., "Adaptive Software Development: A Collaborative Approach to Managing Complex Systems", Dorset House, New York, 2000.

2012年1月21日 明治大学 阪井和男 68

サイクルのない創造プロセス:ミシンはなぜ縫えるか?



※次の論文の第32節「ミシン問題」を参照。阪井和男・高野陽太郎,「後知恵バイアスが隠蔽する創造性:企業イノベーションにおける2つの創発メカニズムの解明 戦略行動による組織文化の創発と場による戦略行動の創発」, 特定非営利活動法人 横断型基幹科学技術研究団体連合, 横幹, 第11巻, 第1号, pp. 32-51, 2017年4月10日.
http://www.trafst.jp/journal/backnumber/11-1/p32-p51-sakai.pdf

※用いた談話記録は次の論文から引用。三宅なほみ,「理解におけるインターラクションとは何か」, 佐伯胖編,『理解とは何か』, 認知科学選書 4, 東京大学出版会, 第3章, p. 76, 1985年11月10日.

2012年1月14日 HRDM・日 阪井和男 74

「個」を強くする大学。
We strengthen the individual.
明治大学
MEIJI UNIVERSITY

3. 誤解される創造性

誤解される創造性

- 創造性に休息はいらない？
  - やる気スイッチを意識的に切る　➔過労死と隣合わせの現生人類
  - 身体の暗黙知を利用する
    - 休息中の身体知、発見「Aha!」の発生
    - デフォルトモードネットワークを活用する
- 創造性に「道具」はいらない？
  - 道具を使えるということ
    - 道具を使い倒してチューニングしまくる　➔ドラッカーの5つの質問

2023年3月21日　明治大学　阪井和男　76

MEIJI UNIVERSITY

創造性に休息はいらない？

なぜ頑張ってしまうのか？

- 現生人類の行動原理
  - 創造性豊かな現生人類とグレートジャーニー
    - 「人類は狂気」(ペーボ, 2023)
      - 「陸があるかわからないのに海を渡る」
      - 「火星に行こうとする」
    - スバンテ・ペーボ(Svante Pääbo)
      - マックス・プランク進化人類学研究所所長、沖縄科学技術大学院大学(OIST)教授(アジャンクト)
      - 2022年ノーベル生理学・医学賞「絶滅したヒト科のゲノムと人類の進化に関する発見」
- 現生人類が獲得した集中力
  - 疲れると頑張らない動物 vs. 疲れを感じない現生人類
    - 動物:疲れると休む
      - 生死にかかわるとき以外は頑張らない
    - 人間:疲れても休まない
      - やる気スイッチを入れっぱなし➔過労死！
    - 意欲を支配する大脳前頭前野の発達の違い

"ペーボ博士インタビュー", ワールドビジネスサテライト(WBS), テレビ東京, 2023年02月08日.

2023年3月11日 明治大学 阪井和男 78

やる気スイッチを切った脱力系の生き方

- タモリの名言
  - 「頑張ると疲れる」
  - 「好きな言葉は『適当』」
  - 「真剣にやれよ！仕事じゃねぇんだぞ！」
  - 「コツはね、張り切らないこと」
- 漫画「浮浪雲」(ジョージ秋山)
  - 『ビッグコミックオリジナル』(小学館)にて、1973年から2017年9月20日発売の同年19号まで長期連載
  - 幕末時代の江戸・東海道の宿場町『品川宿』で問屋を営む「夢屋」の主人・雲(くも)
  - 見かけは髷をきちんと結わず前に結って、女物の着物を身に着けた遊び人の風体
  - 仕事そっちのけでいつも遊んでばかりで、無類の酒好き女好き
  - 風習や物事に一切囚われず飄々としているが、実は柔軟かつ強靭な精神力を持つ
  - 女を見れば老若美醜にお構いなく「おねえちゃん、あちきと遊ばない？」と決め台詞
  - 人を惹きつける魅力を持ち、有事には「雲が一声掛ければ、東海道中の雲助が集まる」
  - 居合い斬りの達人で、たまに両刃の仕込み杖を使った剣術を見せることがある

"タモリの名言30選 | 心に響く言葉", LIVE THE WAY, 2019-09-05 (更新:2020-10-15). https://live-the-way.com/great-man/celebrity/tamori/ (2023年3月11日アクセス)
"浮浪雲", フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』/ https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%AE%E6%B5%AA%E9%9B%B2 (2023年3月11日アクセス)

2023年3月11日 明治大学 阪井和男 79

4. 創造的なアクティビティ

MEIJI UNIVERSITY

大船渡市の地域創生活動

創造的な地域創生活動(大船渡市)

- (知の縁側＋)産官学地域課題研究会(＋IT活用塾)
  - 3部構成の大船渡市地域創生事業(の一つ)
    - ワークショップ原理「隣の学生が最大の学習資源†」(原田康也)
  - 結晶化ワールドカフェ　　➔明治大学サービス創新研究所
    - 創造的グループ思考「交流制約法(TCoM):2時間でできる課題探究と解の創出」
      - TCoMパンフレット:http://service-innovating.jp/upload/ad213489f7c944edc3c35df5182bdf6f.pdf
      - (A4プリンター用、印刷用、完成イメージ):http://service-innovating.jp/activity?page=4
  - ドラッカーの5つの質問ワークショップ
    - 成果が出ない:振り返りの成果指標がずれていないか？
    - どこで思考停止が起こっているか？
    - ドラッカーの5つの質問で思考停止を暴き出す！

2023年3月21日　明治大学　阪井和男　82

創造的グループ思考:交流制約法(TCoM)

ここではまず、解決したい課題の核心を質問による探りだします。

アイデアが自然に湧き出てくる状態になります。

創造的グループ思考「交流制約法(TCoM):2時間でできる課題探究と解の創出」
TCoMパンフレット:http://service-innovating.jp/upload/ad213489f7c944edc3c35df5182bdf6f.pdf
(A4プリンター用、印刷用、完成イメージ):http://service-innovating.jp/activity?page=4

2023年3月21日　明治大学　阪井和男　83

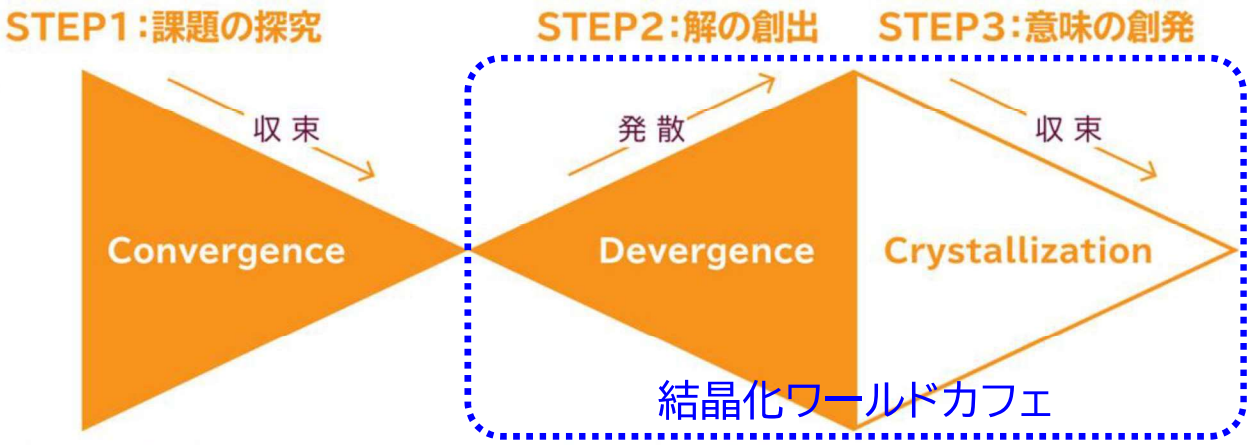
創造的グループ思考：交流制約法（TCoM）

ここではまず、解決したい課題の核心を質問による探りだします。

アイデアが自然に湧き出てくる状態になります。

創造的グループ思考「交流制約法（TCoM）：2時間でできる課題探究と解の創出」
TCoMパンフレット：http://service-innovating.jp/upload/ad213489f7c944edc3c35df5182bdf6f.pdf
（A4プリンター用、印刷用、完成イメージ）：http://service-innovating.jp/activity?page=4

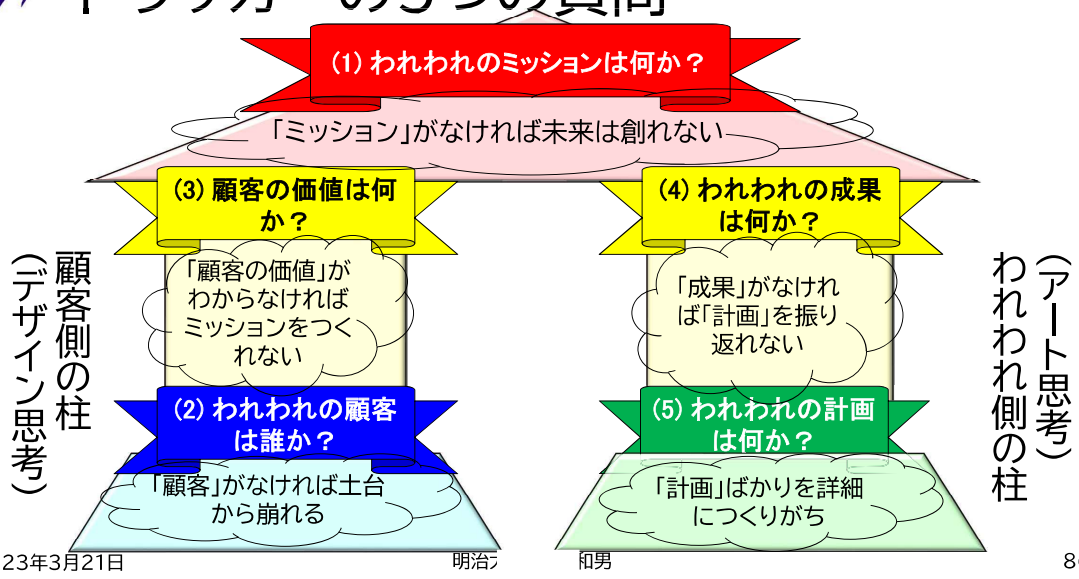
創造的グループ思考：交流制約法（TCoM）



ここではまず、解決したい課題の核心を質問による探りだします。

アイデアが自然に湧き出てくる状態になります。

ドラッカーの5つの質問



産学官地域課題研究会(大船渡市, 2022年度)

- 第1回 結晶化ワールドカフェ
  - 「大船渡温泉オンライン予約サイトがもたらす問題」(志田豊繁・株式会社海楽荘代表取締役)
  - https://note.com/ofunato_kasseika/n/n98beb0231d15
- 第2回 ドラッカーの5つの質問
  - 同上テーマ
  - https://note.com/ofunato_kasseika/n/n7a656320187c
- 第3回 結晶化ワールドカフェ
  - 「NPO法人『おはなしころりん』の話をみんなで真剣に考えました」(江刺由紀子・理事長)
  - https://note.com/ofunato_kasseika/n/n491060fc0bdc
- 第4回 ドラッカーの5つの質問
  - (同上テーマ)
  - https://note.com/ofunato_kasseika/n/n341b19a9e4e8

MEIJI UNIVERSITY

おわりに

隠蔽される創造性

- 創造性とは、成果をもたらす要因のひとつで、
  多くは後知恵によって解釈され、
  思考停止による副作用も伴う。
  - 阪井和男(2022年5月8日)[圧縮50字版の日本創造学会提出バージョン(2022年5月10日)]
- 思考停止に陥らないために・・・

思考停止に陥らないための振り返りのポイント

†"エクセレントNPO基準", 自己評価の15基準, 特定非営利活動法人言論NPO. http://www.excellent-npo.net/%e3%82%a8%e3%82%af%e3%82%bb%e3%83%ac%e3%83%b3%e3%83%88npo%e5%a4%a7%e8%b3%9e/#head3 (2023年1月22日アクセス)

- エクセレントNPO基準† に学ぶ「振り返りのポイント」
  1. あなたは自ら取り組んでいる課題を具体的に把握し、明確に説明できますか。
  2. あなたが取り組む課題について、その背景にある原因に目を向け、社会の仕組みにかかわる問題を視野に入れていますか(社会的インパクトの視点)。
  3. 活動を予定通りに実施したことだけでなく、その対象(人および自然環境などの人以外のものも含む)へのプラスの影響や変化を成果として目指していますか(アウトカム目標)。
  4. あなたは前項で掲げた目標(アウトカム目標)に基づいて出した成果について、根拠(データや事例)をもって説明できますか。
  5. 活動の改善点や新たな活動のヒントを見出し、それを活動の方法や次の計画に反映していますか。

※エクセレントNPO基準† (特定非営利活動法人言論NPO)の「自己評価の15基準」における基本条件「課題解決力」の6基準から汎用性のある5基準を抽出して書き換えた。この基準は自己評価の15基準が示されており、3つの基本条件:市民性(5基準)、課題解決力(6基準)、組織力(4基準)の全15基準から構成されている。

2023年1月27日　明治大学　阪井和男　90

補遺:業績一覧

MEIJI UNIVERSITY

著書

著書

- 秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男(2015), ”新規ビジネスを生み出す芸術思考”, 技術情報協会,『研究成果の早期事業化を実現する新規事業テーマの探し方、選び方、そして決定の条件』, 第5章, 第3節, pp. 301-309, 2015年7月31日.
- 阪井和男(2014),『ドラッカー:人・思想・実践』, ドラッカー学会(監), 三浦一郎・井坂康志(編著), 文眞堂, 第9章, pp. 161-171, 2014年10月1日.
- ジョゼフ A.マチャレロ, カレン E.リンクレター(2013),『ドラッカー　教養としてのマネジメント』, 阪井和男・高木直二・井坂康志(訳), 日本経済新聞出版社, 2013年3月1日.
- 阪井和男(2012),『AFPWAA Japan one year after 3.11　AFP通信が世界に配信した東日本大震災』, AFPWAA.
- 阪井和男(2011),「次世代大学の崇高な使命」, 想隆社,『甦れ！大学ーICTを活用した大学再生へ向けてー』(オンデマンド出版版, 渡邉純一著), あとがき, pp. 112-120., 2011年8月1日.
- 宮脇典彦、阪井和男、和田悟(2011),「SPSSによるデータ解析の基礎[改訂版]」, 培風館, 2011年2月1日.

著書

- 宮脇典彦、阪井和男(2004),「Excelによるデータ解析の基礎[改訂版]」, 培風館, 2004年11月1日.
- 阪井和男(2004),「ゆらぎの科学と技術　ーフラクチュオマティクス入門ー」, 東北大学出版会, 第11章「組織における戦略行動ゆらぎのカオスモデルによる解釈　ーブレークスルーのスキーマ理論ー」, pp. 147-168, 2004年9月15日.
- 新田功・大滝厚・森久・阪井和男(2001),「経済・経営時系列分析(ファジィ・カオス・フラクタル・ウェーブレット・2進木解析の応用)」, 白桃書房, 第5章「ウェーブレット解析」(pp. 127-145), 第6章「ウェーブレットによるGDPの解析」(pp. 147-171, pp. 127-171, 2001年3月26日.
- 宮脇典男・阪井和男・和田悟(2000),「SPSSによるデータ解析の基礎」, 培風館, 2000年11月1日.
- 阿部康一, 阪井和男, 高木友博, 高橋誠, 武田利浩, 古澤照幸, 山下俊之(1998),「インターネット, マルチメディアをよむ(技術, 人, 社会の諸相)」, 日本出版サービス, 第7章「情報環境が促す組織の進化」, pp. 133-164, 1998年5月10日.

著書

- 宮脇典男・阪井和男・小沢和浩・小林一郎(1997),「Excelによるデータ解析の基礎」, 培風館, 1997年12月1日.
- 宮脇典男・阪井和男(1997),「SASによるデータ解析の基礎」, 培風館, 1997年4月7日.
- 大岩幸太郎、阪井和男、二宮智子(1996),「知の技法のための人間・社会・コンピュータ」, 弘学出版社, 第1章「人間と環境」(pp. 1-30), 第2章「情報と社会」(pp. 31-86), pp. 1-86, 1996年4月30日.
- 阪井和男(1995),「カオス」, オーム社,『図解 電気の百科』, 曽根 悟・小谷 誠・向殿 政男(監修), pp. 1135-1137, 1995年5月25日.
- 阪井和男(1995),「フラクタル」, オーム社,『図解 電気の百科』, 曽根 悟・小谷 誠・向殿 政男(監修), pp. 1137-1139, 1995年5月25日.

MEIJI UNIVERSITY

論文・論説(物理系)

論文・論説(物理系)

- HAMMURA, Kiyotaka, YAMAGUCHI, Katsuhiko, and SAKAI, Kazuo(2020), ”Universality of a Gate-Type Quantum Computer Comprising Controlled-Z and Three Rotation Gates, and Its Quantum Advantage over Classical Computers”, Next Generation Studies, Institute for Service Innovation Studies of Meiji University, No. 2, pp. 56-92, May 1, 2020.
- Hammura Kiyotaka and Sakai Kazuo(2005), ”Manifestation of Classical Non-integrability in Magneto-oscillatory Spectra in Cuprous Oxide”, Physical Society of Japan, Journal of the Physical Society of Japan, Vol. 74, No. 3, pp. 1067-1070, 2005年3月1日.
- Kiyotaka Hammura, Kazuo Sakai, Miho Seyama, Yoshinobu Aoyagi(2001), ”Interpretation of Magneto-Oscillatory Spectra in Cuprous Oxide as Quantum Manifestation of Classical Non-Integrability”, Computer Physics Communications, Computer Physics Communications, Vol. 142, pp. 311-315, 2001年12月1日.

2023年3月21日 明治大学 阪井和男 97

論文・論説(物理系)

- Kiyotaka HAMMURA, Kazuo SAKAI, Miho SEYAMA(2000), ”Analysis of Magneto-Oscillatory Spectra in Cuprous Oxide, with Classical `Quasi-Closed’ Unstable Trajectories”, Progress of Theoretical Physics, Progress of Theoretical Physics Supplement, No. 138, pp. 143-144, 2000年4月28日.
- K. Hammura, K. Sakai, M. Seyama(2000), ”Identification of fine structure of magneto-oscillatory spectra in cuprous oxide as quantum manifestation of classical non-integrability”, The 25th International Conference on the Physics of Semiconductors, Proceedings of the 25th International Conference on the Physics of Semiconductors, pp. 117-118, 2000年1月1日.
- Kiyotaka Hammura, Kazuo Sakai, Masaaki Kobayashi, Akira Misu(1998), ”Assignment of quasi-Landau levels in magneto-oscillatory spectra in cuprous oxide to classical unstable trajectories of hydrogen type atoms”, North-Holland (Netherland), Physica B, Vol. 246-247, pp. 416-420, 1998年1月1日.

2023年3月21日 明治 和男 98

論文・論説(物理系)

- Yoshihiro Yamaguchi and Kazuo Sakai(1988), "Structure change of basins by crisis in a two dimensional map", North-Holland, Physics Letters A, Vol. 131, No. 9, pp. 499-504, 1988年9月1日.
- Kazuo SAKAI(1986), "Vibronic theory of a structual phase transition and a tricritical point in IV-IV compounds", American Physical Society, Physical Review B, Vol. 34, No. 11, pp. 8019-8037, 1986年12月1日.
- Yoshihiro Yamaguchi and Kazuo Sakai(1986), "1/f noise spectrum of the chaotic motion in a whisker mapping", North-Holland, Physics Letters A, Vol. 117, No. 8, pp. 387-393, 1986年9月1日.
- Kazuo SAKAI(1985), "Vibronic theory of structual phase transition and tricritical point in IV-IV compounds", The Japan Society of Applied Physics, Japanese Journal of Applied Physics, Vol. 24, Supplement 24-2, pp. 189-191 , 1985年1月1日.

論文・論説(物理系)

- Kazuo Sakai and Yoshihiro Yamaguchi(1984), "Nonlinear dynmics of a Josephson oscillator with a cos ϕ term driven by dc-and ac-current sources" , American Physical Society, Physical Review B, Vol. 30, pp. 1219-1230, 1984年8月1日.
- Yoshihiro Yamaguchi and Kazuo Sakai(1983), "New type of 'crisis' showing hystereses", American Physical Society, Physical Review A, Vol. 27, No. 5, pp. 2755-2758, 1983年5月1日.
- Kazuo Sakai, Chikara Ishii and Hidetoshi Fukuyama(1981), "Effects of impurities on diamagnetic susceptibility of bismuth", Physical Society of Japan, Journal of the Physical Society of Japan, Vol. 50, No. 11, pp. 3590-3602, 1981年11月1日.

MEIJI UNIVERSITY

論文・論説(情報系)

論文・論説（情報系）

- 阪井和男（2004），「複雑系の情報学」，明治大学科学技術研究所，明治大学科学技術研究年報，Vol. 45，pp. 46-47，2004年11月1日．
- 阪井和男（2004），「「情報の通常化」の時代に向けて　～「支援」のための組織から、「推進」のための組織再編へ～」，明治大学情報科学センター，明治大学情報科学センター年報，Vol. 16，pp. i-iii，2004年11月1日．
- 阪井和男（2002），「明治大学における情報環境」，サイエンティフィック・システム研究会，サイエンティフィック・システム研究会 教育用クライアントWG 平成13年度成果報告書，pp. 16-28，2002年5月1日．
- 阪井和男（2002），「教育の情報化を推進する大学の組織デザイン」，明治大学学術フロンティア推進事業SHIPプロジェクト，第5回共同シンポジウム（予稿・資料集），pp. 33-50，2002年4月1日．
- 阪井和男（2002），「リバティタワー情報環境構築の発想の原点とこれまでの経緯」，私立大学キャンパスシステム研究会第一分科会運営委員会，1998年度第一分科会活動記録詳報，第5巻，pp. 239-262，2002年3月1日．

2023年3月21日　明治大学　阪井和男　102

論文・論説（情報系）

- 阪井和男（2001），「明治大学における情報教育と情報環境」，サイエンティフィック・システム研究会，教育用クライアントWG 平成12年度成果報告書，pp. 27-33，2001年5月1日．
- 阪井和男（2000），「リバティタワー情報環境構築の発想の原点とこれまでの経緯」，私立大学キャンパスシステム研究会第一分科会運営委員会，1998年度第一分科会活動記録詳報，第5号，pp. 239-262，2000年3月1日．
- 阪井和男（1999），「明治大学が目指す21世紀の情報環境」，サイエンティフィック・システム研究会，『SS研Shuttle』，第7号，p. 3，1999年6月1日．
- 阪井和男（1999），「プレゼンテーションツールとしてのWebブラウザ」，明治大学，『パソコン活用実験授業プロジェクト報告書』，1999年3月1日．
- 阪井和男（1998），「すべての教材をホームページに」，明治大学広報部，季刊『明治』，創刊号,特集ー私の授業計画（リバティタワーの機能を生かして），pp. 18-19，1998年10月18日．
- 阪井和男（1998），「情報活用型の基礎的情報教育の実践」，明治大学情報科学センター，明治大学情報科学センター年報，No. 10，pp. 23-34，1998年10月1日．
- 阪井和男（1998），「プレゼンテーション環境について」，明治大学総合企画部学事課，『学長室だより』，1998年度．第1号，No. 28，pp. 10-11，1998年6月25日．

2023年3月21日　明治大学　阪井和男　103

論文・論説（情報系）

- 阪井和男（1998），「明治大学の情報化－21世紀のキャンパスシステム「リバティタワー」を中心としたコミュニケーション環境のコンセプトを中心に－」，早稲（1998）田大学メディアネットワークセンター，MNC Communications，Issue 1，1998年6月15日．
- 阪井和男（1998），「パソコン活用実験授業報告」，明治大学，『パソコン活用実験授業プロジェクト報告書』，pp. 16-20，1998年5月1日．
- 阪井和男（1998），「インターネットによる情報化の今後の方向」，財団法人全国下請企業振興協会，『発注企業オンライン・ネットワーク事業（OLNET）報告書（平成9年度中小企業庁委託事業）』，pp. 94-112，1998年3月1日．
- 阪井和男（1998），「リバティタワーにおける新教育環境と新しい教育の風」，明治大学，『明治大学広報』，卒業生特集，第429号，1998年1月1日．
- 阪井和男（1997），「情報文化におけるインターネットの意味と方向」，情報文化学会，情報文化学会第5回全国大会講演予稿集，pp. 32-35，1997年11月8日．
- 阪井和男・他（1997），「インターネット時代の情報倫理教育」，明治大学情報科学センター，『明治大学情報科学センター年報』，第9号，pp. 65-108，1997年10月1日．

2023年3月21日　明治大　和男　104

論文・論説(情報系)

- 阪井和男(1997),「見え始めた新生明治大学への道」, 明治大学,『パソコン活用実験授業プロジェクト報告書』, pp. 124-125, pp. 124-125, 1997年5月1日.
- 阪井和男(1997),「パソコン活用実験授業プロジェクト報告」, 明治大学,『パソコン活用実験授業プロジェクト報告書』, pp. 31-35, 1-35, 1997年5月1日.
- 阪井和男(1997),「レポートメールの勧め」, 明治大学,『パソコン活用実験授業プロジェクト報告書』, pp. 93-97, pp. 93-97, 1997年5月1日.
- 阪井和男(1997),「教育形態の分化と充実」, 明治大学総合情報システム協議会,『明治大学総合情報システム協議会情報化将来構想委員会報告書』, pp. 6-9, 1997年3月28日.
- 阪井和男(1997),「近未来の情報環境」, 明治大学総合情報システム協議会,『明治大学総合情報システム協議会情報化将来構想委員会報告書』, pp. 20-26, 1997年3月28日.
- 阪井和男(1997),「情報化は大学をどう支援するか」, 明治大学総合情報システム協議会,『明治大学総合情報システム協議会情報化将来構想委員会報告書』, pp. 35-38, 1997年3月28日.
- 阪井和男(1997),「情報化支援部署のこれまでの問題点と今後の方向」, 明治大学総合情報システム協議会,『明治大学総合情報システム協議会情報化将来構想委員会報告書』, pp. 39-44, 1997年3月28日.

論文・論説(情報系)

- 阪井和男(1997),「情報倫理と明治大学」, 明治大学総合情報システム協議会,『明治大学総合情報システム協議会情報化将来構想委員会報告書』, pp. 15-19, 1997年3月28日.
- 阪井和男(1997),「情報活用教育の展開」, 明治大学総合情報システム協議会,『明治大学総合情報システム協議会情報化将来構想委員会報告書』, pp. 49-51, 1997年3月28日.
- 阪井和男(1997),「衛星放送による遠隔授業の実現を目指して」, 明治大学総合情報システム協議会,『明治大学総合情報システム協議会情報化将来構想委員会報告書』, pp. 64-70, 1997年3月28日.
- 阪井和男(1997),「A地区『教育棟』の情報基盤」, 明治大学校友課, 明治大学広報(卒業生特集), 第411号, 1997年1月1日.
- 阪井和男(1997),「インターネットの今後の展開について」, 明治大学広報部, 明治大学広報, 第411号, 1997年1月1日.
- 阪井和男(1996),「インタラクティブコミュニケーション」, 社団法人私立大学情報教育協会 情報教育研究委員会専門分科会,『1997年度情報基礎教育のモデルシラバス』, pp. 111-135, 1996年11月1日.

論文・論説(情報系)

- 阪井和男(1996),「明治大学情報科学センターの現状と将来」, 私立大学キャンパスシステム研究会, 創立10周年記念企画「中国ー日本キャンパスシステム研究会」実施報告書, 1996年3月1日.
- 熊谷惟明・山本恒・芦葉浪久・阪井和男(1996),「私立大学における基礎的情報教育の在り方」, 社団法人私立大学情報教育協会, 情報教育研究委員会第2分科会大学における基礎的情報教育検討小委員会, pp. 1-11, 1996年3月1日.
- Makoto Nishizaki, Kazuo Sakai, Toshimitsu Musha and Masao Mukaidono(1995) , "A Simulation of EEG using Chaotic Bursting", 10th Symposium on Biological and Physiological Engineering (BPES'95), (Hokkaido Univ., Hokkaido, Japan, Nov. 30--Dec. 2, 1995), Proceedings of the 10th Symposium on Biological and Physiological Engineering, pp. 337-340, 1995年11月30日.
- 阪井和男(1995),「ネットワークに求められる三つの倫理」, (社)日本私立大学連盟, 大学時報, 特集:変わるキャンパスコミュニケーション, 1995年7月号、Vol.44, No.243, 第44巻243号(通巻256号), pp. 68-73, 1995年7月20日.

論文・論説(情報系)

- 阪井和男(1995),「マルチメディア時代のネットワークに向けて」, 明治大学総合情報システム協議会MIND運用部会MIND利用者サービスワーキンググループ, パティオ, 第2号, p. 2, 1995年7月20日.
- 阪井和男(1995),「ネットワークに求められる三つの倫理」, (社)日本私立大学連盟,『大学時報』(特集:変わるキャンパスコミュニケーション), 1995年7月号, 44巻243号(通巻256号), pp. 68-73, 1995年7月20日.
- 阪井和男(1995),「情報化社会における情報環境と大学の情報化」, 社団法人私立大学情報教育協会, 平成7年度事務システム基礎講習会参加資料, グランドホテル浜松(静岡県浜松市), pp. 12-13, および別添資料, pp.0-74, 1995年7月18日.
- 阪井和男(1995),「情報化社会における情報環境と大学の情報化」, 社団法人私立大学情報教育協会, 事務システム基礎講習会,『平成7年度 事務システム基礎講習会参加資料』, pp. 12-13, および別添資料 pp.0-74, 1995年7月18日.
- 阪井和男(1995),「センタ組織による情報教育と支援 (明治大学情報科学センターは何を目指すか)」, 社団法人私立大学情報教育協会,『平成7年度 情報教育問題フォーラム資料』, pp. 55-56, 1995年7月7日.

論文・論説(情報系)

- 阪井和男(1995),「今、社会に求められる利用技術とは」, 高度情報化利用技術者育成推進協議会, HiTEC NEWS, 創刊号, p. 3, p. 3, 1995年4月1日.
- 阪井和男(1995),「コンピュータがもたらす『コミュニケーション革命』」, 現代文集編集委員会、川村一之,『現代文集(戦後50年--50年後の社会へのメッセージ)』, pp. 64-65, 1995年1月1日.
- 阪井和男(1994),「情報科学センターによる学部共通情報教育の新体系」, 明治大学情報科学センター, 明治大学情報科学センター年報, 1993年度、第6号, pp. 33-49, 1994年12月22日.
- SAKAI Kazuo, MACHIDA Tomio and MUKAIDONO Masao(1994), "Chaotic Responses in a Self-Recurrent Fuzzy Inference with Nonlinear Rules", The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers, IEICE Trans. Fundamentals, Vol. E77-A, No. 11, pp. 1736-1741, 1994年11月1日.
- 阪井和男(1994),「明治大学の新情報教育の試み」, 社団法人私立大学情報教育協会, 第8回私情協大会, アルカディア市ヶ谷(私学会館), 1994年8月31日.
- 阪井和男(1994),「明治大学の新情報教育の試み」, 社団法人私立大学情報教育協会(アルカディア市ヶ谷(私学会館)), 第8回私情協大会資料, pp. 38-40, 1994年8月31日.

論文・論説(情報系)

- 阪井和男(1994),「明治大学の新情報教育と情報環境」, 私立大学情報教育協会, 私情協ジャーナル SUMMER'94, Vol. 3, No. 1 (通巻第66号), pp. 28-30, 1994年6月27日.
- 伊藤晴紀・古澤実・幸田康弘・阪井和男・殿政男(1994),「少データ点による曲面生成」, 情報処理学会, 第48回(平成6年前期)全国大会、講演論文集(分冊1), p. 1-35～36., 1994年3月25日.
- 古澤実・阪井和男・向殿政男(1994),「ウェーブレット変換を用いた画像生成」, 情報処理学会, 第48回(平成6年前期)全国大会講演論文集(分冊2), p. 1-35～36., 1994年3月25日.
- Kazuo Sakai, Tomio Machida and Masao Mukaidono(1993), "Chaotic Responses in a Self-Recurrent Fuzzy Inference with Nonlinear Rules", 1993 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, (Sheraton Waikiki Hotel, Honolulu, HAWAII, December 5-9, 1993), Proceedings of the 1993 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, Vol. 1, pp. 117-122., 1993年12月5日.
- 阪井和男(1992),「海外調査報告:1991年度データベース海外調査報告」, 明治大学情報科学センター,『明治大学情報科学センター年報』, No. 4, pp. 29-46, 1992年10月1日.

論文・論説(情報系)

- 阪井和男(1992),「問題解決のアプローチ手段としてのプログラミング手法について(ブラックボックスの分析と設計)」, 私立大学等情報処理教育連絡協議会, 私情協会報, 第91-4号(57号), pp. 14-16, 1992年3月1日.
- 阪井和男(1991),「非線形最適化問題へのファジィ推論の応用試論」, 明治大学教養論集刊行会, 明治大学教養論集, 第240号巻, pp. 35-94, 1991年3月1日.
- 阪井和男(1989),「『並列計算原理』の解明に期待する道具としての『現象論』」, ユー・ピー・ユー,『ザ・インター　技術論文集』, 大学院生号, p. 10, 1989年1月10日.
- 阪井和男(1988),「『安く高性能』へ、コンピュータは並列処理」, 世界文化社,『ビズトレンド』, Vol. 1,　p. 55, 1988年12月1日.

MEIJI UNIVERSITY

論文・論説(認知系)

論文・論説(認知系)

- 森下美和・阪井和男・富田英司・原田康也(2022), ”留学による認知変容・行動変容:ふりかえりの分析”, 電子情報通信学会思考と言語研究会, 信学技報, TL2021-37(2022-03), pp. 31-36, 2022年3月13日.
- 片山硬、橋本博、阪井和男(1997),「第47回自動車技術会賞受賞,「自動車運転時のドライバーの脈波のゆらぎ」、片山硬、橋本博、阪井和男」, 社団法人自動車技術会, 自動車技術会論文集, Vol. 27, No. 4, Oct. 1996、pp. 89-93., 1997年5月22日.
- 片山硬、橋本博、阪井和男(1997),「自動車運転時のドライバーの脈波のゆらぎ」, 社団法人自動車技術会, 自動車技術会論文集, Vol. 27, No. 4, Oct. 1996、pp. 89-93, 1997年5月22日.
- 西崎誠・阪井和男・武者利光・向殿政男(1997),「異常脳波のカオスモデル」, 電気学会, システム・制御研究会資料、SC-97-6, pp. 35-39, 1997年2月28日.
- 佐藤秀樹、阪井和男、武者利光、向殿政男(1995),「ウェーブレット解析を用いた脳波による感情識別システムの構築」, 日本ファジィ学会, 第11回ファジィシステムシンポジウム講演論文集, pp. 601-602, 1995年7月12日.

論文・論説(認知系)

- Kazuo Sakai, Tsuyoshi Katayama, Satoshi Wada and Kotaro Oiwa(1995), ”Chaos Causes Perspective Reversals for Ambiguous Patterns”, Springer, Berlin, Advances in Intelligent Computing, eds. B. Bouchon-Meunier, R. R. Yager and L. A. Zadeh, , pp. 463-472, 1995年1月1日.
- Tsuyoshi Katayama and Kazuo Sakai(1994), ”Fluctuation of Capillary Pulse as an Index for Driver’s Internal States”, 1994 Vehicle Navigation and Information Systems Conference, (Yokohama, Japan, Aug. 31-Sep. 2, 1994), 1994 Vehicle Navigation and Information Systems Conference Proceedings, (Yokohama, Japan, Aug. 31-Sep. 2, 1994), pp. 11-14, VNIS’94 IEEE CATALOG #94CH35703 , 1994年8月31日.
- Kazuo Sakai, Tsuyoshi Katayama, Satoshi Wada and Kotaro Oiwa (1994), ”Chaos Causes Perspective Reversals for Ambiguous Patterns”, Proc. of the Fifth Int. Conf. on Information Processing and Management of Uncertainty in Knowledge-Based Systems, Vol. 1, pp. 370-375, 1994年7月4日.

論文・論説(認知系)

- Kazuo Sakai, Tsuyoshi Katayama, Satoshi Wada and Kotaro Oiwa(1993) , ”Perspective Reversal Caused by Chaotic Switching in PDP Schema Model”, IEEE International Conference on Neural networks (San Francisco, USA, March 28-April 1, 1993), Proceedings of the 1993 IEEE International Conference on Neural Networks, Vol. 3, pp. 1938-1943, 1993年3月28日.
- Kazuo Sakai, Tsuyoshi Katayama, Kotaro Oiwa and Satoshi Wada(1992), ”New mechanism to transfer schemata caused by transfer crises”, The 2nd International Conference on Fuzzy Logic and Neural Networks (Iizuka, Japan) , Proceedings of The 2nd International Conference on Fuzzy Logic and Neural Networks, pp. 149-152, 1992年7月17日.
- Kazuo SAKAI, Tsuyoshi KATAYAMA, Kotaro OIWA and Satoshi WADA(1992), ”Theory of chaotic dynamics with transfer crises in a mean-field PDP schema model(Discovery of transfer crises and its cognitive meanings)”, Meiji Unviersity, The Bulletin of Arts and Science Meiji University, No. 249, pp. 105-150, 1992年3月1日.

論文・論説(認知系)

- 阪井和男・和田悟(1992),「ユニットの疲労効果を取り入れた連想型スキーマモデル」, 明治大学教養論集刊行会,『明治大学教養論集』, 249号, 自然科学, pp. 27-66, 1992年3月1日.
- 阪井和男・片山硬・大岩幸太郎・和田悟(1992),「平均場近似によるPDPスキーマモデルのカオスダイナミクスの理論」, 明治大学教養論集刊行会,『明治大学教養論集』, 249号, 自然科学, pp. 67-104, 1992年3月1日.
- 阪井和男(1988),「思考のモデル『数学的基礎論に期待する「モデル」の科学的方法論』」, ユー・ピー・ユー,『ザ・インター　技術論文集』, Vol. 6, p. 54, 1988年3月20日.
- 阪井和男(1988),「クレームはピグマリオン症候群への警鐘」, ユー・ピー・ユー,『ザ・インター　技術論文集』, Vol. 6, p. 104, 1988年3月20日.

MEIJI UNIVERSITY

論文・論説(経営系)

論文・論説(経営系)

- 阪井和男(2021), 抄録"基調講演「ドラッカーが提案するだろう我が国の小児科医、小児医療への提言」", 第124回日本小児科学会学術集会(2021年4月16日),『日本小児科学会雑誌』, 第125巻, 第2号, pp. 123-124, 2021年2月1日.
- 阪井和男・高野陽太郎(2017), "後知恵バイアスが隠蔽する創造性:企業イノベーションにおける2つの創発メカニズムの解明:戦略行動による組織文化の創発と場による戦略行動の創発",『横幹』, 第11巻, 第1号, pp. 32-51, 2017. DOI https://doi.org/10.11487/trafst.11.1_32
- 戸田博人・阪井和男・森憲一・森貴子(2016), "企業業績に直接貢献する教育プログラムの ID モデルによる分析", 情報コミュニケーション学会, 情報コミュニケーション学会第13回全国大会発表論文集, pp. 108-109, 2016年2月28日.
- 阪井和男・戸田博人・森憲一・森貴子・原田康也(2016), "ドラッカーの5つの質問からみる組織イノベーションの活動特性", 情報コミュニケーション学会, 情報コミュニケーション学会第13回全国大会発表論文集, pp. 110-115, 2016年2月28日.
- 阪井和男・内藤隆(2013), "感情によるワークショップ効果測定法の提案:創造的なワークショップでは課題提起者の感情はどう変化するか", 電子情報通信学会, 信学技報, 第112号(442), pp. 13-18, 2013年2月.

論文・論説(経営系)

- 阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一郎・中川貴之(2013), "談話分析によるハイパフォーマンスチームのイノベーションプロセスのモデル化:会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析", 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 113, no. 82, pp. 1-6, 2013年6月7日.
- 阪井和男・内藤隆・森憲一・森貴子・中村雄一・中川貴之(2013), "感情に焦点をあてたハイパフォーマンスチーム特性の交流分析による可視化:会社を超えた半年間の実践的人材育成研修後の振り返り分析", 2013年度サービス学会第1回国内大会講演論文集, pp. 57-64, 2013年4月10日.
- 阪井和男・内藤隆(2013), "感情によるワークショップ効果測定法の提案:創造的なワークショップでは課題提起者の感情はどう変化するか", 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 112, no. 442, pp. 13-18, 2013年2月15日.
- 内藤隆・小林広尚・高野雅之・阪井和男(2012),「グループ討議における課題提起者の自己開示による心理的・行動的影響」, 情報コミュニケーション学会, 第9回全国大会発表論文集, pp. 36-37, 2012年3月10日.

論文・論説(経営系)

- 尾上正幸・内藤隆・阪井和男(2012),「勘と経験を活かしたサービス創新を生み出すコミュニケーションミーティング」, 情報コミュニケーション学会, 第9回全国大会発表論文集, pp. 38-39, 2012年3月10日.
- 阪井和男・栗山健(2012),「パラダイム破壊型ブレークスルーを目指すグループ討議方法(収束発散思考によるサービス創新メソッド「交流制約法」の提案)」, 情報コミュニケーション学会, 第9回全国大会発表論文集, pp. 30-35, 2012年3月10日.
- 阪井和男(2005),「カオス的遷移による組織イノベーションの創発モデル」, 社団法人計測自動制御学会, 第32回知能システムシンポジウム資料、京都工芸繊維大学, pp. 377-382, 2005年3月17日.
- 阪井和男(2004),「ヒトは感情とどう向き合えばよいか(囚人のジレンマによる感情の進化と脳のマネジメント)」, 情報コミュニケーション学会, 情報コミュニケーション学会研究報告, 社会コミュニケーション部会, Vol. 1, No. 2、pp. 5-15, 2004年12月1日.
- 阪井和男(2004),「カオスが引き起こす戦略の創造」, 私立大学キャンパスシステム研究会, 2003年度私立大学キャンパスシステム研究会第一分科会活動記録詳報, 第10巻, pp. 108-126, 2004年5月1日.

論文・論説(経営系)

- 阪井和男(2004),「知の創発を目指した学会活動の確立に向けて」, 情報コミュニケーション学会, 第1回全国大会発表論文集, pp. 1-2, 2004年2月1日.
- 阪井和男(2003),「組織における戦略行動のゆらぎと自発的なカオス的遷移」, 日本ゆらぎ現象研究会, 第18回ゆらぎ現象研究会抄録集, pp. 24-27, 2003年11月1日.
- 阪井和男(2003),「組織文化の学習効果がもたらす戦略行動のカオス的遷移」, 組織学会, 2003年度組織学会研究発表大会報告要旨集, pp. 5-8, 2003年6月1日.
- 阪井和男(2002),「方略スキーマモデルによる戦略行動のカオス的ダイナミクスと組織文化の機能」, 情報文化学会, 情報文化学会連合研究会論文集, 第1号, pp. 12-23, 2002年11月1日.
- 阪井和男(1997),「企業における情報化の方向」, 明治大学総合情報システム協議会,『明治大学総合情報システム協議会情報化将来構想委員会報告書』, pp. 26-30, 1997年3月28日.
- 阪井和男(1997),「インターネットホームページとOLNETについて」, 財団法人全国下請企業振興協会,『発注企業オンライン・ネットワーク事業(OLNET)報告書(平成8年度中小企業庁委託事業)』, pp. 111--117, 1997年3月1日.
- 阪井和男(1996),「組織の適応力とカオス」, (財)労務行政研究所,『労政時報』, , 1996年9月6日.

論文・論説(経営系)

- 阪井和男(1996),「発注企業オンライン・ネットワーク事業の今後の展開」, 財団法人全国下請企業振興協会, 発注企業オンライン・ネットワーク事業報告書(平成7年度中小企業庁委託事業), 第V章, pp. 105-112, 1996年3月1日.
- 阪井和男(1991),「変貌するキャンパスライフ」, 明治大学職員会,『明治大学職員会会誌』, 第18号, pp. 7-12, 1991年6月1日.

MEIJI UNIVERSITY

論文・論説(教育系)

論文・論説(教育系)

- 阪井和男・齊尾恭子(2022), ”SDGs講座の構造化学習ユニットによる展開:SDGs教育の授業づくりのための素材と運営法を共有するオープン教育リソースの提案”, 日本ESD学会,『ESD研究』, 第5号, pp. 107-117, 2022年8月20日.
- 阪井和男・齊尾恭子(2022), ”SDGs講座の構造化学習ユニットによる展開”. https://docs.google.com/document/d/1Kb5AZZS0V-fwHJc62QTxIkyls8LklzRN6VwnjGjhZOo/edIT?usp=sharing (最終閲覧日:2022年5月1日).
- 阪井和男・齊尾恭子・山本幸太郎(2022), ”構造化学習ユニットのjsonによる実装と編集ツールの公開”, IMS-CASE研究会第4回例会(2022年度第1回), 日本IMS協会, 2022年7月6日.
- 阪井和男(2021), ”対面型とオンライン同時双方向型を同期させるハイフレックス授業の実践と教育評価”, 明治大学専任教授連合会,『明大専教連会報』, 2020年度専任教授連合会フォーラム「コロナ禍と大学」(pp. 13-42, 2021年1月26日), 第115号, 通巻205号, pp. 23-34, 2021年3月31日.

2023年3月21日 明治大学 阪井和男 124

論文・論説(教育系)

- 森下美和・有賀三夏・原田康也・阪井和男・富田英司(2020)「多重知能理論アンケート調査にもとづく学生のふりかえり」,『日本認知科学会第37回大会発表論文集』, pp. 247-253.(査読), 2020年9月17日.
- 阪井和男(2019), ”対話の機能とモデル:共生的な社会的態度の育成から市民性の創造へ”, アカデミック・コーチング学会,『アカデミック・コーチング学会第4回年次大会資料集』「実践者と研究者が紡ぐ新しい実践と研究のあり方:『対話』による市民性の創造」, pp. 2-14, 2019年11月3日.
- 阪井和男(2018), “多重知能理論とその大学教育への応用:アクティブラーニング設計原理としての多重知能理論の可能性”,電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ, Fundamentals Review,第11巻, 第4号, pp. 266-287, 2018年. DOI https://doi.org/10.1587/essfr.11.4_266
- 阪井和男・有賀三夏・村山眞理・戸田博人・大島伸矢(2016), “因子分析法を用いた多重知能分析アンケートの開発”, 信学技報, 電子情報通信学会, vol. 115, no. 441, TL2015-63, pp. 47-52, 2016年1月. https://ken.ieice.org/ken/paper/20160130Bb5Q/

2023年3月21日 明治大 阪井和男 125

論文・論説(教育系)

- 坂本美枝・半田純子・宍戸真・阪井和男・新田目夏実(2016), ”発話練習における学習者の内省分析”, 早稲田大学情報教育研究所,『言語学習と教育言語学2015年度版』, 日本英語教育学会編集委員会(編), pp. 1-11, 2016年3月31日.
- 坂本美枝・半田純子・宍戸真・阪井和男(2014), “準ネイティブスピーカによるオンライン発話指導の実践報告”, e-Learning教育研究, 第9巻, pp. 21-28, 2014年. DOI https://doi.org/10.20623/well.9.0_21
- 坂本美枝・半田純子・宍戸真・阪井和男(2014),「カランメソッドを用いた英語発話練習:オンライン・マンツーマン指導」, 教育工学会, 2014年日本教育工学会第30回全国大会講演論文集, pp. 831-832, 2014年9月12日.
- 阪井和男・戸田博人・栗山健(2014), ”場を介在するスキル学習を統合する概念モデルの提案”, 情報コミュニケーション学会, 第13回研究会発表論文集, pp. 10-17, 2014年7月5日.
- 阪井和男・鈴木克明・原田康也・小松川浩・戸田博人・多賀万里子(2012), ”知的能力の可視化WG成果報告書”, サイエンティフィック・システム研究会. https://www.ssken.gr.jp/MAINSITE/download/wg_report/pf/index.html

論文・論説(教育系)

- 阪井和男・栗山健(2011), ”談話分析による創発プロセスの可視化に向けて:マイクロ・アブダクションの連鎖としての創発プロセス”, 電子情報通信学会, 信学技報, 第111号(320), pp. 71-76, 2011年11月26日.
- 宮原俊之・鈴木克明・阪井和男・大森不二雄(2010), “高等教育機関におけるeラーニングを活用した教育活動を支える組織支援体制:「大学eラーニングマネジメント(UeLM)モデル」の提案”, 教育システム情報学会誌, 第27巻, 第2号, pp. 187-198, 2010年. DOI https://doi.org/10.14926/jsise.27.187
- 阪井和男(2012),「カオスの縁としての情報教育に期待する」, 明治大学和泉委員会, 明治大学リベラル・アーツ フォーラム, 第15号,「和泉キャンパスにおける情報教育の新たな展開」, 明治大学和泉委員会, pp. 2-4, 2012年3月1日.
- 阪井和男・栗山健(2011),「談話分析による創発プロセスの可視化に向けて ～マイクロ・アブダクションの連鎖としての創発プロセス～」, 電子情報通信学会, 電子情報通信学会技術研究報告(信学技報), vol. 111, no. 320, TL2011-51, pp. 71-76, 2011年11月26日.

論文・論説(教育系)

- 多賀万里子, 阪井和男, 鈴木克明(2011),「学習者の行動変化を確認する論理思考のCan-Doリストを用いたリフレクションの効果(法学部初年次における実験的試み)」, 教育システム情報学会, 第36回全国大会講演論文集, pp. 312-313, 2011年9月1日.
- 阪井和男・栗山健(2011),「次世代大学の使命」, 情報コミュニケーション学会, 第7回研究報告, Vol. 8, No. 1 (2011-01), pp. 4-11, 2011年8月27日.
- 阪井和男・栗山健(2010),「知的能力を使い倒すための場の機能と学習 ーアフォーダンスがもたらす場の創造性ー」, 電子情報通信学会技術研究報告(信学技報), vol. 110, no. 313, TL2010-45, pp. 51-56, 2010年11月27日.
- 宮原俊之・鈴木克明・阪井和男・大森不二雄(2010),「高等教育機関におけるeラーニングを活用した教育活動を支える組織支援体制「大学eラーニングマネジメント(UeLM)モデル」の提案」, 教育システム情報学会, 教育システム情報学会学会誌, Vol. 27, No. 2, pp. 187-197, 2010年6月30日.
- 阪井和男(2009),「学びと場の創発 ー大学教育のイノベーションー」, 社団法人電子情報通信学会, 電子情報通信学会技術研究報告(信学技報), vol. 109, no. 297, TL2009-33, pp. 25-28, 2009年11月21日.

論文・論説(教育系)

- 阪井和男(2008),「MITのオープンコースウエアから見える明治大学の問題点」, 明治大学専任教授会連合, 明大専教連会報, 第96号 通巻186号, pp. 3-5, 2008年11月15日.
- 栗山健, 阪井和男, 宮原俊之(2008),「学びのイノベーション・ダイアグラム」, 情報コミュニケーション学会, 研究報告, 第5巻2号, pp. 3-9, 2008年11月1日.
- 阪井和男(2008),「理解を深めるクラスルーム型授業の課題と提案」, サイエンティフィック・システム研究会, SS研Shuttle, 第37号, p. 10, 2008年11月1日.
- 宮原俊之・阪井和男・鈴木克明(2008),「「日本型大学モデル(改良版)」を用いたeラーニング運営組織体制の検証」, 教育システム情報学会,『教育システム情報学会第33回全国大会講演論文集』, pp. 322-333, 2008年9月1日.
- 栗山健・阪井和男・宮原俊之(2008),「理解にいたる教えと学びのプロセスモデル　～知の変容モデルと学びのイノベーション・ダイアグラムの提案～」, サイエンティフィック・システム研究会, 教育の質の向上WG 成果報告書, pp. 10-20, 2008年8月1日.
- 阪井和男(2008),「大学改革とeラーニング」, 読売新聞社, 九州版、2008年新春インタービュー特集, 第14面, 2008年1月1日.

論文・論説(教育系)

- 宮原俊之・阪井和男・栗山健・大森不二雄(2007),「eラーニング運営のための情報流通視覚化手法の提案　～ 明治大学ユビキタスカレッジ構想の事例から～」, 日本教育工学会, 第23回全国大会講演論文集, pp. 349-350, 2007年9月1日.
- K. Kuriyama and K. Sakai(2007), "An Agent Oriented Environment for Collaborative Learning: Lessons Learned Through Vocational Training on Software Design with UML", Springer-Verlag Berlin Heidelberg 2007, Lecture Notes in Artificial Intelligence 4694, (Ed) J. G. Carbonell and J. Siekmann, Subseries of Lecture Notes in Computer Science; Bruno Apolloni, Robert J. Howlett, and Lakhmi Jain (Eds.): Knowledge-Based Intelligent Information and Engineering Systems, LNAI-4694, pp. 567-574, 1 Sep. 2007.
- Kazuo Sakai, Ken Kuriyama, Toshiyuki Miyahara, Hiroko Yamada, Hiroshi Yasuhara, Toshiyuki Matsuki and Yusaku Maekawa(2007), "Learning innovation model in e-learning and its evaluation method", ITHET, Proc. of the 8th Int. Conf. on Information Technology Based Higher Education and Training (ITHET07), pp. 567-572, 10 July 2007.

論文・論説(教育系)

- 阪井和男(2007),「イノベーション＝ブレークスルー(＝認知的流動性＋部分最適化)＋ブレークスルー」, 情報コミュニケーション学会, 情報コミュニケーション学会メールマガジン創刊号, , 2007年4月17日.
- Kazuo SAKAI, Ken KURIYAMA and Toshiyuki MIYAHARA(2007), "The e-Learning Strategy of Organizational Design Emerging the New University Education for the Next Generation", ETHICOMP, Proc. of the Ninth Int. Conf. on ETHICOMP 2007, Meiji University, Tokyo, Japan, 27-29 March 2007, Ed. by T. W. Bynum, S. Rogerson, K. Murata, Vol. 2, pp. 493-505, 1 Mar. 2007.
- 阪井和男・栗山健・宮原俊之・山田浩子・安原弘・松木俊之・前川裕作(2007),「オンデマンド授業の学習効果と目標達成度にBBSの活用は影響するか」, 情報コミュニケーション学会, 第4回全国大会発表論文集, pp. 57-62, 2007年2月1日.
- 宮原俊之・阪井和男・栗山健(2006),「eラーニング導入・推進の戦略構想とその分析:明治大学ユビキタスカレッジ構想の事例から」, 日本教育工学会, 日本教育工学会第22回全国大会発表論文集, pp. 923-924, 2006年11月1日.

論文・論説（教育系）

- 宮原俊之・阪井和男（2006），「高等教育におけるeラーニング推進の戦略構想の分析：明治大学ユビキタスカレッジ構想を事例として」，教育システム情報学会第31回全国大会講演論文集（知の創成と人材育成のための情報技術基盤），pp. 203-204，2006年8月1日.
- 阪井和男・宮原俊之・栗山健・茂手木聡・小林建太郎（2006），「高等教育におけるeラーニング導入推進のための組織設計」，教育システム情報学会，『教育システム情報学会第31回全国大会講演論文集（知の創成と人材育成のための情報技術基盤）』，pp. 213-214，2006年8月1日.
- 阪井和男（2006），「オンデマンド授業による新しい教育方法の確立に向けて（実務教育科目の実践例と今後の方向性）」，オンデマンド授業流通フォーラム事務局，第2回オンデマンド授業研究セミナー報告書，pp.1-16，2006年8月1日.
- 阪井和男（2005），「情報科学センター解体論　～情報科学センターの発展的解消に向けて～」，明治大学，明大広報，第564号，論壇，2005年11月1日.
- 阪井和男（2005），「ユビキタス社会に向けて」，明治大学，『明治』，第28号、pp.22-23，2005年10月15日.

2023年3月21日　明治大学　阪井和男　132

論文・論説（教育系）

- 小棹理子・阪井和男（2002），「柔らかな情報教室で実践する問題解決法：Net-BWとPC-AHP」，平成14年度情報処理教育研究集会講演論文集，pp. 420-423，2002年10月1日.
- 中嶋正夫・阪井和男・加藤浩（1996），「プログラミング・アプローチに対する定量化と分析システム」，情報処理学会研究報告『コンピュータと教育 研究報告』，No. 41，pp. 9-16，1996年9月20日.
- 阪井和男（1996），「『知恵』としての『方法論』を学ぼう」，明治大学，大学広報委員会，『思索の樹海』，pp. 125-130，1996年4月1日.
- 中嶋正夫・阪井和男・加藤浩（1994），「操作履歴のチャートによるプログラミング・アプローチの分析」，情報処理学会，第48回（平成6年前期）全国大会講演論文集（分冊1），p. 1-35～36，1994年3月24日.
- 中嶋正夫、阪井和男、加藤浩、西垣通（1993），「アプローチ指向の教育支援のためのビジュアル言語エディタとシミュレータの統合」，情報処理学会，第47回（平成5年後期）全国大会講演論文集（分冊1），pp. 1-35～36，1993年10月7日.
- 阪井和男（1992），「パネルディスカッション報告：文系情報教育はどうあるべきか？」，明治大学情報科学センター，『明治大学情報科学センター年報』，No. 4，pp. 47-68，1992年10月1日.

2023年3月21日　明治大学　阪井和男　133

MEIJI UNIVERSITY

論文・論説（地方系）

論文・論説(地方系)

- 明治大学サービス創新研究所(2022), ”令和3年度IT活用課題解決型人材育成プログラム効果検証報告書”, 株式会社地域活性化総合研究所, 岩手県大船渡市, 2022年3月31日. https://www.city.ofunato.iwate.jp/uploaded/attachment/30927.pdf
- 阪井和男(2020), ”大船渡市に寄り添う阪井ゼミの活動”,『震災等復興活動支援センター活動記録集:「若者の未来」のために、復興支援の輪を広げる』(2011年度～2019年度), 明治大学震災等復興活動支援センター, 2020年5月31日.
- 阪井和男(2019), ”対話による共生的な社会的態度の育成:信州エクスターンシップにおける市民性の創造の試みから”, 全国共同出版,『農業協同組合経営実務』(2019年第74巻増刊号), 第74巻, 第10号(通巻931号), pp. 13-26, 2019年9月15日.
- 阪井和男(2017), ”信州エクスターンシップの航跡”, JA 共済総合研究所,『共済総合研究』別冊, pp. 16-33, 2017年11月15日.
- 阪井和男・池田啓実・早川政宏・松井秀夫・坂知樹・鈴木賞子・川井真・内藤邦男・高木英彰・川尻知弥(2017), ”農山漁村地域の再生・活性化に向けた若年層の地方人材還流戦略:首都圏大学生を対象とした地域滞在型就業体験事業「信州エクスターンシップ」から見えてきたこと”, JA共済総合研究所,『共済総合研究』別冊, pp. 86-127, 2017年11月15日.

論文・論説(地方系)

- 阪井和男・鈴木賞子・松井秀夫・早川政宏・川井真・内藤邦男・池田啓実・坂知樹・高木英彰・川尻知弥(2017), ”公開ワークショップ:農山漁村地域の再生・活性化に向けた若年層の地方人材還流戦略:首都圏大学生を対象とした地域滞在型就業体験事業「信州エクスターンシップ」から見えてきたこと”, JA 共済総合研究所,『共済総研レポート』, vol.152, pp. 14-29, 2017年8月1日.
- 阪井和男(2016), ”「本気」の場づくりが学生と社会人の学習を促す:「信州エクスターンシップ」における企業の人材育成と大学のキャリア教育の統合を目指して”, 全国共同出版,『農業協同組合経営実務』増刊号, pp. 54-66, 2016年9月15日.
- 吉澤潔・阪井和男・川井真(2016), ”地域経済社会ベースのインターンシップが農業セクターの若年層人材戦略を促す”, JA共済総合研究所,『共済総合研究』, 第72号, pp. 76-91, 2016年3月31日.
- 吉澤潔・阪井和男・川井真(2015), ”農業セクターへの若年層人材還流について:戦略としてのインターンシップ”, JA 共済総合研究所,『共済総合研究』, 第71号, pp. 10-31, 2015年9月1日.
- 阪井和男・永井優子・齊藤博美・今道正博(2014), ”東日本大震災ニュースソースとタブレット型電子デバイスのクラウド活用による科学的思考法ワークショップにおける教育効果の解析”, 情報コミュニケーション学会第11回全国大会発表論文集, pp. 132-139, 2014年3月2日.

論文・論説(地方系)

- 阪井和男・つむぎプロジェクト推進協議会(2012),「【岩手県】阪井ゼミ大船渡学習支援報告(第3回つむぎWorkshop)」, 明治大学連合父母会, http://www.meiji-parents.jp/rengou/topics/3workshop.html (2012年3月20日アクセス), 2012年3月15日.
- 阪井和男・つむぎプロジェクト推進協議会(2012),「【岩手県】法学部阪井ゼミが大船渡で学習支援！(2)」, 明治大学連合父母会, http://www.meiji-parents.jp/rengou/topics/2-4.html (2012年3月20日アクセス), http://www.meiji-parents.jp/rengou/topics/2-4.html 2012年3月20日アクセス), 2012年2月20日.
- 阪井和男・つむぎプロジェクト推進協議会(2012),「【岩手県】法学部阪井ゼミが大船渡で学習支援！(1)」, 明治大学連合父母会, http://www.meiji-parents.jp/rengou/topics/post-250.html (2012年3月20日アクセス), http://www.meiji-parents.jp/rengou/topics/post-250.html (2012年3月20日アクセス), 2012年2月16日.

論文・論説（地方系）

- 阪井和男・つむぎプロジェクト推進協議会（2012），「被災地に贈られた希望の灯　～大船渡・クリスマスツリー点灯式～」，製作：明治大学，制作：ユビキタス教育推進事務室，制作協力：株式会社アイ・フォスター，2011年12月5日 岩手県大船渡市大船渡町，2011年12月5日 岩手県大船渡市大船渡町，2012年2月1日.
- 阪井和男（2012），「日本社会の病根（劣化する知性を打破するには？）」，明治大学文明とマネジメント研究所，2011年度実証実験報告書「社会と連携した次世代型教育プログラム（ソーシャルセクター・ビジネスセクターとの協働を目指して）」，pp. 17-24，2012年1月31日.
- 阪井和男（2012），「実証実験の検証（英語コミュニケーション特訓講座）」，明治大学文明とマネジメント研究所，2011年度実証実験報告書「社会と連携した次世代型教育プログラム（ソーシャルセクター・ビジネスセクターとの協働を目指して）」，pp. 16-20，2012年1月31日.
- 阪井和男・高木直二（2012），「社会と連携した次世代型教育プログラム（ソーシャルセクター・ビジネスセクターとの協働を目指して）」，明治大学文明とマネジメント研究所，2011年度実証実験報告書，2012年1月31日.

MEIJI UNIVERSITY

論文・論説（芸術系）

論文・論説（芸術系）

- 秋山ゆかり・阪井和男（2020），「アート思考はブームになったのか？：デザイン思考とアート思考の社会的受容」，『次世代研究』，明治大学サービス創新研究所，No. 2，pp. 42-55，2020年5月1日.
- 有賀三夏・阪井和男・國藤進・下郡啓夫・永井由佳里（2019），”芸術思考による多重知能の活性化とその成功要因”，日本創造学会，第41回日本創造学会研究大会（北陸先端科学技術大学院大学、2019年9月28日～29日），2019年9月28日.
- 秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男（2015），”新規ビジネスを生み出す芸術思考”，技術情報協会，『研究成果の早期事業化を実現する新規事業テーマの探し方、選び方、そして決定の条件』，第5章，第3節，pp. 301-309，2015年7月31日.
- 秋山ゆかり・有賀三夏・阪井和男（2015），”新規事業を生み出す芸術思考”，情報コミュニケーション学会第12回全国大会発表論文集，pp. 60-69，2015年2月28日.
- 阪井和男・戸田博人・内藤隆・有賀三夏・片桐隆嗣（2014），”行動観察を用いた多重知能理論にもとづく芸術系ワークショップの評価と特徴”，情報コミュニケーション学会，第15回研究会発表論文集，pp. 3-12，2014年11月8日.

論文・論説(芸術系)

- 村山眞理・有賀三夏・阪井和男(2014), "生きる力を育む芸術思考", 情報コミュニケーション学会第15回研究会発表論文集, pp. 17-20, 2014年11月8日.
- 阪井和男・戸田博人・内藤隆・有賀三夏・片桐隆嗣(2014), "行動観察を用いた多重知能理論にもとづく芸術系ワークショップの評価と特徴", 情報コミュニケーション学会研究報告, Vol. 11, No. 3, pp. 3-12, 2014.
- 阪井和男・有賀三夏(2012), "生きる力を育む芸術思考:知的能力の統合的な育成を目指して", 情報コミュニケーション学会第10回研究会(優秀発表賞), vol, 9: pp. 14-19, 2012年10月6日.

おわり